

伊万里市文化財調査報告書第22集
伊万里市内古窯跡調査報告第4集

神 谷 窯 跡

(甕屋の谷窯跡)

—伊万里市大川町所在・近世古窯跡調査の概要—

1987.3

佐 賀 県
伊万里市教育委員会

伊万里市文化財調査報告書第22集
伊万里市内古窯跡調査報告第4集
神谷窯跡 正誤表

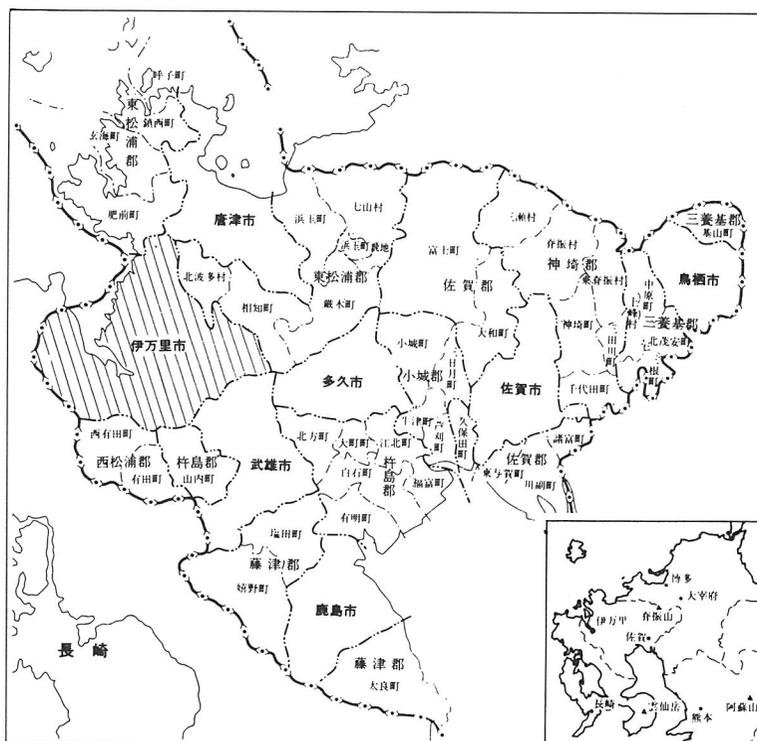
ページ・行	誤	正
巻頭 図版	(南から)	(南西から)
8・11	Fig 6	Fig 5
8・17	E 室	F 室
15・8	で胎である。	で露胎である。
PL-10 3	奥陸東隅	奥壁東隅

伊万里市文化財調査報告書第22集

伊万里市内古窯跡調査報告第4集

かみ や かま あと 神 谷 窯 跡

伊万里市大川町所在・近世古窯跡調査の概要



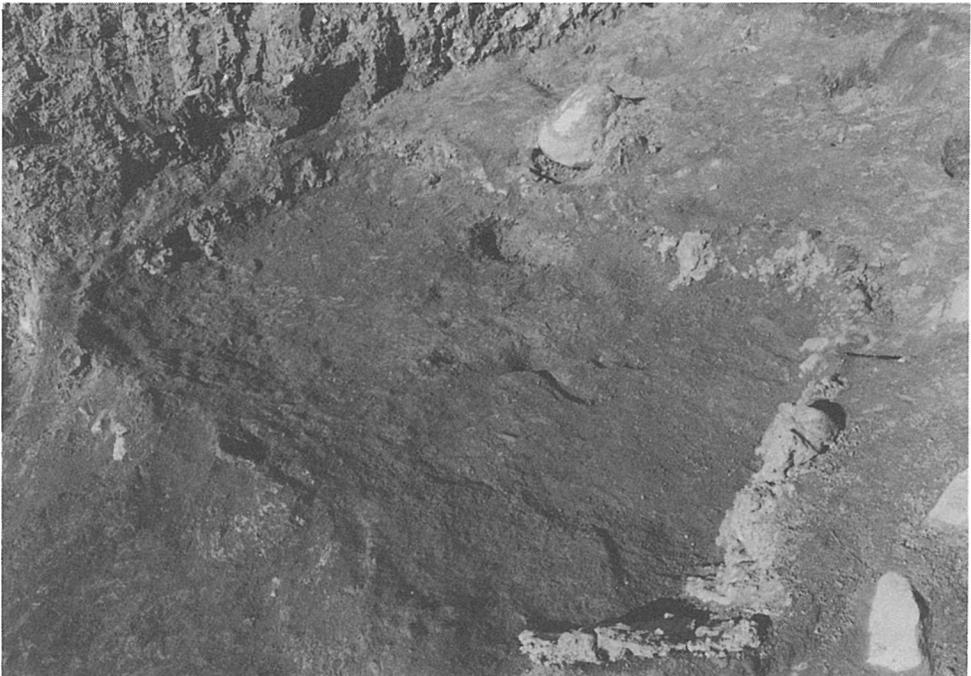
伊万里市の位置

佐 賀 県

伊万里市教育委員会



神谷竊跡調査区全景（南から）



神谷竊跡H室状況（南東から）

序

伊万里市内には桃山時代末期から、近世にわたる陶磁器の窯跡が多数所在しております。特に市内東部の大川町、南波多町は江戸時代唐津藩領に属しており、松浦唐津と称される陶器の窯跡が多数残存しております。

今回調査致しました「神谷窯跡」は、梅沢記念館所蔵で国の重要文化財に指定されている「松文輪花皿」が出土した窯跡として著名であります。その存在は早くから古陶磁研究者には優れた絵唐津を焼造した名窯として知られていましたが、窯の実態は今度の調査が実施されるまで解明されておりました。今回当窯跡の構造や規模、焼造品の内容を知る手掛りを得たことは大きな成果の一つでありました。

私達は、地域の地理的・歴史的な個性を構成する重要な要素となっているこれらの窯跡を保護し、子孫に残すとともに出土品を広く市民に公開し、地域の理解と学術文化の向上に活用していくことが今こそ必要であると考えております。

今回報告します「神谷窯跡概略報告書」は、昭和61年度、国・県の補助事業として実施したものです。多々不備な点があるかと思いますが、本書が広く市民各位の文化財保護思想の育成と郷土理解の資料として活用されることを望むものであります。

最後に、この調査にご協力を頂いた、文化庁・県文化課・地元の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和62年 3月

伊万里市教育委員会

教育長 黒 木 淳 吉

例 言

1. 本書は昭和58年から国庫補助事業として実施している、市内古窯跡群詳細分布調査の第4年次目（昭和61年度）に実施した神谷窯跡の概略報告書である。
2. 調査は国庫・県費の補助を受けて伊万里市教育委員会が実施した。
3. 資料整理にあたっては、伊万里市歴史民俗資料館の城島秋光、中島法子両氏のご協力を受けた。
4. 調査は伊万里市教育委員会社会教育課文化係が実施し、調査員は社会教育課文化係、文化財専門員の盛峰雄があたった。
5. 本書の執筆編集は盛があたり、片岡史子、山口艶子両氏の協力を得た。
6. 事務局は伊万里市教育委員会社会教育課長・井手正範が総括し、主に文化係長・福田克己、文化係・盛があたった。
7. 調査によって出土した遺物は、伊万里市教育委員会が保管の任にあっている。
8. 今回調査した神谷窯跡の県教育委員会登録略号は、K・M・Yである。
9. 本書は伊万里市文化財調査報告書第22集にあたる。

凡 例

1. 本書中に使用したFig 1～3は座標北であるがFig 5・6は磁北である。
2. 本書中Fig 8～32の通し番号の右側の文字は出土地点をあらわす。例えば「H火床」はH室火床の略「カク」は攪乱層（Fig 7 I層～VII層）出土の略。「表」は表土層（Fig 7、I層）出土の略である。
3. 本書中の図版の縮尺は不統一である。

本 文 目 次

序	頁
I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
3. 調査日誌抄	2
II. 調査の概要	3
1. 遺跡の立地と環境	3
2. 調査の概要	7
III. 遺 構	8
IV. 遺 物	14
V. おわりに	42

挿 図 目 次

Fig 1 . 神谷窯跡の位置	2
Fig 2 . 周辺窯跡分布図 ($\frac{1}{25,000}$)	3
Fig 3 . 神谷窯跡周辺地形図 ($\frac{1}{5,000}$)	4
Fig 4 . 神谷窯跡地籍図 ($\frac{1}{600}$)	5
Fig 5 . 神谷窯跡地形図 ($\frac{1}{200}$)	6
Fig 6 . 神谷窯跡遺構実測図 ($\frac{1}{40}$)	9~10
Fig 7 . 神谷窯跡調査区東壁土層断面図 ($\frac{1}{40}$)	11~12
Fig 8 . 神谷窯跡出土遺物実測図 鉄絵皿 ($\frac{1}{3}$)	17
Fig 9 . 神谷窯跡出土遺物実測図 鉄絵皿 ($\frac{1}{3}$)	18
Fig10 . 神谷窯跡出土遺物実測図 鉄絵皿 ($\frac{1}{3}$)	19
Fig11 . 神谷窯跡出土遺物実測図 鉄絵皿 ($\frac{1}{2}$)	20
Fig12 . 神谷窯跡出土遺物実測図 鉄絵皿 ($\frac{1}{2}$)	21
Fig13 . 神谷窯跡出土遺物実測図 鉄絵皿 ($\frac{1}{2}$)	22
Fig14 . 神谷窯跡出土遺物実測図 鉄絵皿 ($\frac{1}{2}$)	23
Fig15 . 神谷窯跡出土遺物実測図 鉄絵皿 ($\frac{1}{2}$)	24
Fig16 . 神谷窯跡出土遺物実測図 鉄絵皿 ($\frac{1}{2}$)	25
Fig17 . 神谷窯跡出土遺物実測図 鉄絵皿 ($\frac{1}{2}$)	26
Fig18 . 神谷窯跡出土遺物実測図 鉄絵皿 ($\frac{1}{2}$)	27
Fig19 . 神谷窯跡出土遺物実測図 甕 ($\frac{1}{3}$)	28
Fig20 . 神谷窯跡出土遺物実測図 甕 ($\frac{1}{3}$)	29
Fig21 . 神谷窯跡出土遺物実測図 片口 ($\frac{1}{2}$)	30
Fig22 . 神谷窯跡出土遺物実測図 播鉢 ($\frac{1}{3}$)	31
Fig23 . 神谷窯跡出土遺物実測図 播鉢 ($\frac{1}{3}$)	32
Fig24 . 神谷窯跡出土遺物実測図 壺 ($\frac{1}{2}$)	33
Fig25 . 神谷窯跡出土遺物実測図 壺、徳利 ($\frac{1}{2}$)	34
Fig26 . 神谷窯跡出土遺物実測図 徳利、水指 ($\frac{1}{2}$)	35
Fig27 . 神谷窯跡出土遺物実測図 碗、皿、壺 ($\frac{1}{2}$)	36
Fig28 . 神谷窯跡出土遺物実測図 把手、耳 ($\frac{1}{2}$)	37
Fig29 . 神谷窯跡出土遺物実測図 底部 ($\frac{1}{2}$)	38
Fig30 . 神谷窯跡出土遺物実測図 窯道具 ($\frac{1}{3}$)	39
Fig31 . 神谷窯跡出土遺物実測図 窯道具 ($\frac{1}{3}$)	40
Fig32 . 神谷窯跡出土遺物実測図 甕底部拓影 ($\frac{1}{2}$)	41
Fig33 . 梅沢記念館所蔵国重要文化財「松文輪花皿」	42

表 目 次

Tab1. 窯室計測値 13

図 版 目 次

- | | |
|--------------------------------|---------------------------|
| PL 1 -1. 神谷窯跡遠景（南西から） | PL15-1. 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿） |
| PL 1 -2. 神谷窯跡調査前状況（南東から） | PL15-2. 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿） |
| PL 2 -1. 神谷窯跡調査区全景（南西から） | PL16-1. 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿） |
| PL 2 -2. 神谷窯跡調査区全景（北東から） | PL16-2. 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿） |
| PL 3 -1. 神谷窯跡E室状況（南東から） | PL17-1. 神谷窯跡出土遺物（甕） |
| PL 3 -2. 神谷窯跡F室状況（南東から） | PL17-2. 神谷窯跡出土遺物（甕） |
| PL 4 -1. 神谷窯跡F室状況（北西から） | PL18-1. 神谷窯跡出土遺物（片口・播鉢） |
| PL 4 -2. 神谷窯跡F室状況（北東から） | PL18-2. 神谷窯跡出土遺物（壺・徳利） |
| PL 5 -1. 神谷窯跡F室西窯壁残存状況（南東から） | PL19-1. 神谷窯跡出土遺物（碗・皿・底部他） |
| PL 5 -2. 神谷窯跡F室奥壁東隅状況（南西から） | PL19-2. 神谷窯跡出土遺物（窯道具） |
| PL 6 -1. 神谷窯跡G室状況（南東から） | |
| PL 6 -2. 神谷窯跡G室状況（北西から） | |
| PL 7 -1. 神谷窯跡H室状況（南東から） | |
| PL 7 -2. 神谷窯跡H室床面東半部状況（北東から） | |
| PL 8 -1. 神谷窯跡H室火床残存状況（南東から） | |
| PL 8 -2. 神谷窯跡H室焼き口遺物出土状況（北西から） | |
| PL 8 -3. 神谷窯跡H室東壁残存状況（北西から） | |
| PL 9 -1. 神谷窯跡I室状況（南東から） | |
| PL 9 -2. 神谷窯跡I室状況（北西から） | |
| PL10-1. 神谷窯跡I室奥壁残存状況（南西から） | |
| PL10-2. 神谷窯跡I室東壁残存状況（北西から） | |
| PL10-3. 神谷窯跡I室奥壁東隅状況（南西から） | |
| PL11-1. 神谷窯跡J室状況（南東から） | |
| PL11-2. 神谷窯跡J室状況（北西から） | |
| PL12-1. 神谷窯跡F・G・H室状況（南東から） | |
| PL12-2. 神谷窯跡G・H・I・J室状況（南西から） | |
| PL13-1. 神谷窯跡H・I・J室状況（南西から） | |
| PL13-2. 神谷窯跡調査風景 | |
| PL14-1. 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿） | |
| PL14-2. 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿） | |

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

神谷窯跡^{註1}は、伊万里市大川町川原字枇杷木に所在している。この窯跡は古くから古唐津の名窯として知られていた窯跡^{註2}であり、近代化農業の推進とともに果樹園として開墾され^{註3}、まったくその存在すらわからなくなっていた。昭和61年3月下旬の長雨により、果樹園の南斜面の一部が崩壊し、そこに真赤な焼土が露出している、との連絡を受けた市教育委員会では、現地調査を行い窯床の一部であることを確認した。このまま放置すれば徐々に崩壊してしまうおそれがあるので、露出した部分とさらに崩壊しそうな範囲を含めて発掘調査を実施して記録を取るとともに、下位から斜面の築き直しをして窯跡の保存を行う方向で地権者と協議を行い、昭和61年度国庫補助事業で採り上げることにして、その計画書を文化庁に提出した。

この神谷窯跡に関する文献資料は皆無であり、古唐津の名窯とされながらもその窯跡の実体は何も判明していなかったため、調査では①窯体の構造と規模、②焼造品の内容、の二点を明らかにすることを目的として、昭和61年10月から11月にかけて発掘調査を実施した。

註1. 当窯跡に関する文献で最も早い例には昭和10年に水町和郎により編纂された『肥前古窯址めぐり』田中平安堂 1935 がありその中では、瓶屋の谷（唐津系 陶器〔絵唐津〕窯）とある。今回の遺跡の標記は『佐賀県遺跡地図（杵西地区）』佐賀県教育委員会、1981 の神谷窯跡にした。

註2. 国の重要文化財に指定されている、梅沢記念館所蔵の「松文輪花皿」は、この窯跡の出土品といわれている。

註3. 昭和30年代後半までは竹林と棚田であり、昭和40年代後半に果樹園として開墾されて現状のような地形に変貌している。

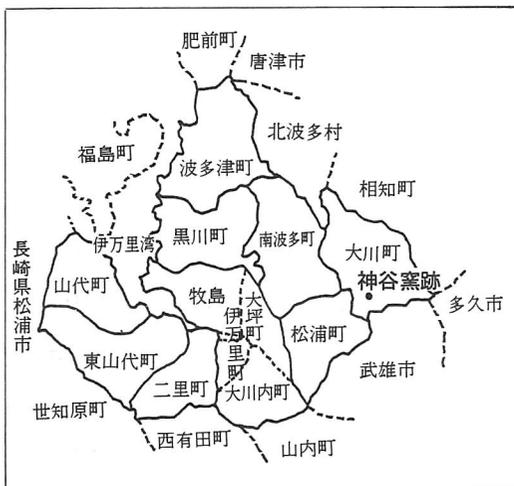
2. 調査組織

- | | | | |
|--------------------|-------------|--------------------|--------------|
| 1)調査主体 | 伊万里市教育委員会 | 6)調査協力 | 古藤 一郎・下平 恒男 |
| 2)調査委員長 | 市教育長 黒木 淳吉 | 古藤 タセヨ・池田 岩雄・納所 タマ | |
| 3)〃副委員長 | 〃 次長 嘉村 政則 | 池田 ミツノ・田代 満春・池田 トミ | |
| 4)〃委員 | 市文化財保護審議会委員 | 池田 フミ子 | |
| 田中 時次郎・原口 静雄・下平 恒男 | | 7)事務局長 | 社会教育課長 井手 正範 |
| 森 醇一郎・前山 博・金子 信二 | | 〃 局員 | 社会教育課文化係長 |
| 吉永 源三郎・志佐 惲彦・辻 悟 | | | 福田 克己 |
| 木原 武雄 | | 〃 局員 | 社会教育課文化係 |
| 5)調査員 | 社会教育課文化係 | | 盛 峰雄 |
| | 盛 峰雄 | | |

3. 調査日誌抄

(昭和61年)

- 10月4日 器材搬入
- 10月6日 調査地の草刈り及び防風林の除去、調査区の設定
- 10月7・8日 バックホーによる表土の除去作業。予想以上に客土層が厚い（2～3m）うえに傾斜面につき手間取る。
- 10月8日 調査区の南端より排土作業を開始する。傾斜地で排土先が上方になり困難する。
- 10月9日 F室の西壁の一部とE・F・G室の砂床面の一部を検出する。
- 10月13日 F室の砂床の検出と一部H室の排土作業。H室横焚口の一部を検出する。
- 15日 H～J室の砂床の検出作業。
- 16日 写真撮影の為午前中清掃。午後各窯室等の写真撮影。
- 17日 出土遺物の水洗作業。
- 20日 遺構実測割りつけ作業。
- 21日 出土遺物の水洗作業。
- 22日 E・F室の平面実測作業。
- 23～25日 G～J室の平面実測作業。
- 27日 周辺地形測量のため水準点の移動。土層断面図の作成。
- 28日 土層断面実測図作成作業。地形測量。
- 30～31日 補足調査、写真撮影。
- 11月3日 大川町川原公民館で1日出土品展及び現地説明会



- 11月4日 E～G室の埋戻し。
- 5日 G～J室の埋戻し。
- 6日 全体の埋戻し。
- 7日 調査区の整地作業及び器材搬出。

Fig. 1 神谷窯跡の位置

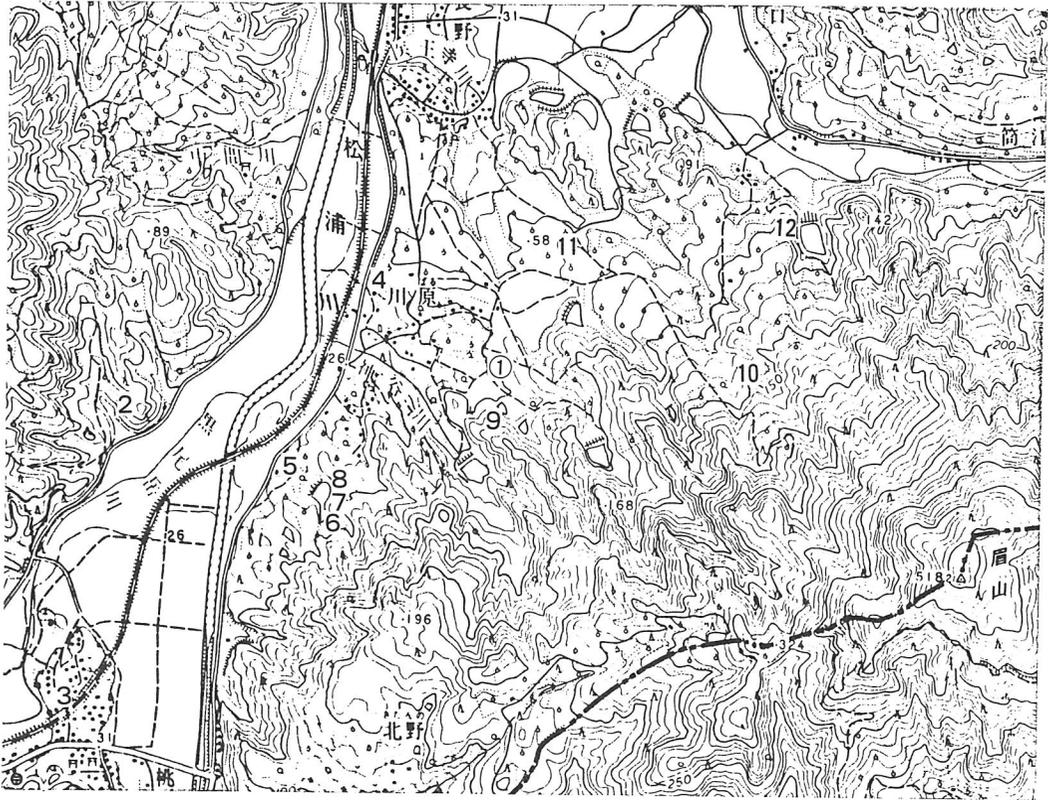


Fig. 2 周辺窯跡分布図 (1/25,000)

- | | | |
|--------|---------|----------|
| ① 神谷窯跡 | 5 畑田窯跡 | 9 一若窯跡 |
| 2 道園窯跡 | 6 焼山上窯跡 | 10 梅坂窯跡 |
| 3 瓶山窯跡 | 7 焼山中窯跡 | 11 佐次郎窯跡 |
| 4 片草窯跡 | 8 焼山下窯跡 | 12 善徳窯跡 |

II. 調査の概要

1. 遺跡の立地と環境

神谷窯跡は、伊万里市大川町川原字枇杷木4794番地他に所在している。大川町は、伊万里市街地の東方8Kmに位置する果樹栽培と畜産の盛んな地域であるとともに、桃山時代末期から江戸時代後期にかけての陶器の窯跡の多い地域でもある。大川町の南辺には標高518mの眉山が位置し武雄との境をなす。また、東辺には標高763mの八幡岳を主峰とする山塊が位置し、相知町と多久市との境をなしている。西辺域には町域を区画するように松浦川が北流している。この松浦川に向かって眉山の北方域では小河川が小さな谷を解析して、標高50mから100m程の小舌状の丘陵地形を形成している。

当窯跡の所在する川原地区は、町域の南端眉山から北西方向に伸びた丘陵地形の先端域、松



Fig.3 神谷窯跡周辺地形図 (1/5,000)

浦川に面した標高20mから40mに立地する戸数58戸程の小集落である。この川原地区には、中世末期から近世に亘る松浦唐津系等の窯跡が多数所在している。一説によると、慶長の初期に美濃の加藤四郎右衛門景延が技術取得の為唐津の浪人、森善右衛門に案内されて訪れたのはこの川原地区の古窯跡の一つであったろうともいわれている。また、この地区の古唐津の窯跡は、文禄3年(1594)の波多氏滅亡により離散した陶工の流れをくむものがあるとされており、古唐津の伝播や系譜を研究するうえで、南波多町の椎の峰と並んで肥前窯業史研究上見逃せない重要な地域である。

南に眉山山塊が横たわり、その地勢は南に高く北方に低くなっており、神谷川などの小河川が北西に向って流路を刻み松浦川へと注ぎ込んでいる。これらの中小河川に刻まれた狭小な谷地と狭長な丘陵地とが交互に位置する地形景観が眉山の西部域から北部域に亘って広がっている。川原集落は狭長な三丘陵の先端域に形成されており、東西の小さな谷で概ね三つの区域に分割されている。家並は、これらの丘陵主軸に沿ってほぼ東西に連なっており、谷地は谷水田として開墾され、集落の東端部から上位の地域は、棚田や果樹園として利用されている。集落の東南域(眉山の方向)に源を発した神谷川が北西に向って流路を刻み、神谷谷かみやだにと称される狭小な谷地をつくり、集落を分割するとともに、標高50mから60mの平低な丘陵地を形成している。

神谷窯跡は、この東西300mにわたって伸びた狭長な舌状の丘陵の基部・標高60mに丘陵の主

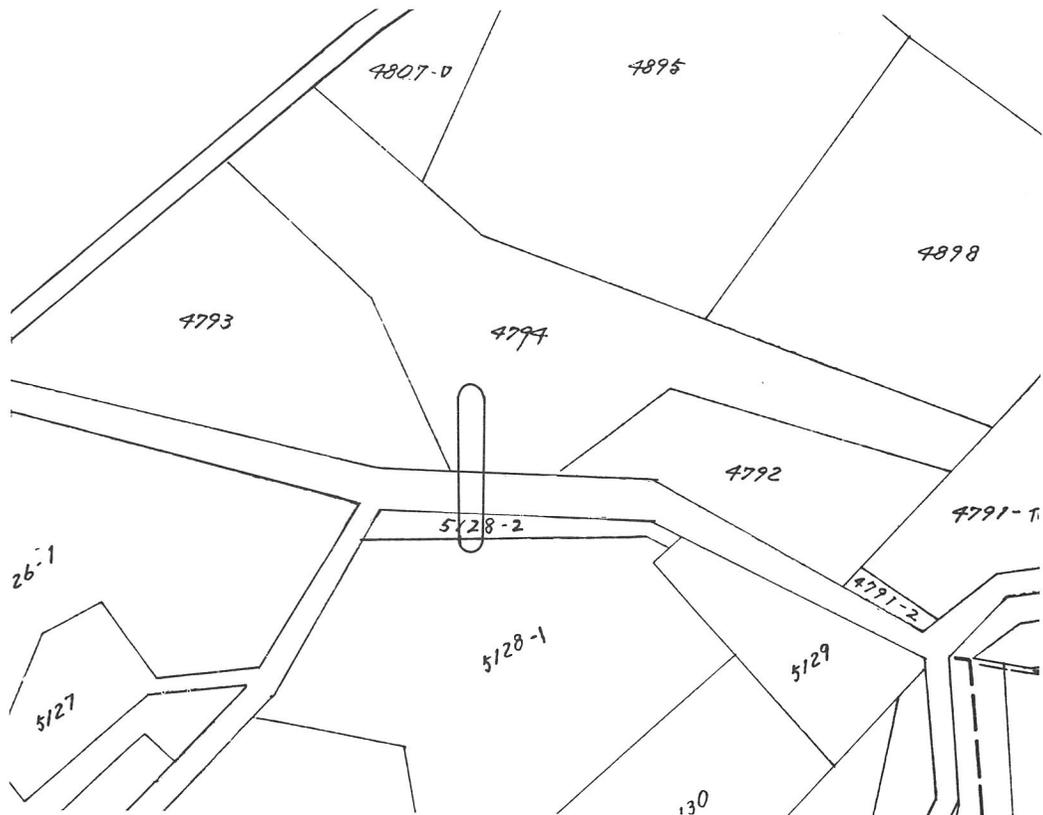


Fig. 4 神谷窯跡地籍図 (1/600)

軸に直交して位置している。この窯跡の位置する川原集落の周辺には、当窯跡で出土する甕の口縁部形態と相似した口縁部形態の甕を多く出土する梅坂窯跡^{註2}や、すぐ南に谷を隔てて位置する一若窯跡^{註3}がある。この一若窯跡も神谷窯跡^{註4}で多く出土する甕と類似した甕や片口を多く出土する窯跡である。

焼山窯跡は上・中・下の三基^{註5}があり、中・下窯跡からは、神谷窯跡でよく出土する松文の絵唐津と同じような松を描いた皿^{註9}が出土している。これらの窯跡は、一般に慶長年間(1596~1614)から元和二年(1616)ごろに操業した窯だとも言われているが、明確な文書等はない。この他江戸時代の享保年中に操業したといわれている善徳窯^{註10}や佐次郎窯、片草窯などの陶器窯跡が点在しており、当地に於ける古期(16世紀末~17世紀初頭頃)と新期(18世紀以降)の陶器生産の実態を解明する上で、また大川町の歴史を究考する上でも重要な遺跡となっている。

- 註1. 『瀬戸大竈取立由来書』貞享三年(1686)にあり、現在岐阜県土岐市久尻に加藤景延が築いたという元屋敷窯跡(唐津系の連房式登り窯)がある。
- 註2. 『市内古窯跡分布調査報告書』伊万里市教育委員会 1984、現在幅1.9m奥行2.3mの窯室が5室残っている神谷窯跡と類似した甕片が出土する。
- 註3~8. 『市内古窯跡分布調査報告書』伊万里市教育委員会 1984。
- 註9. 『世界陶磁全集7』頁278 Fig181の36などは神谷窯跡出土の松文の皿とよく類似している。
- 註10. 伊万里市土井町遺跡の発掘調査出土品中に、善徳窯の製品と考えられる碗があり18世紀中葉から後半の磁器(くらわんか茶碗)と同一層中から共伴出土している。

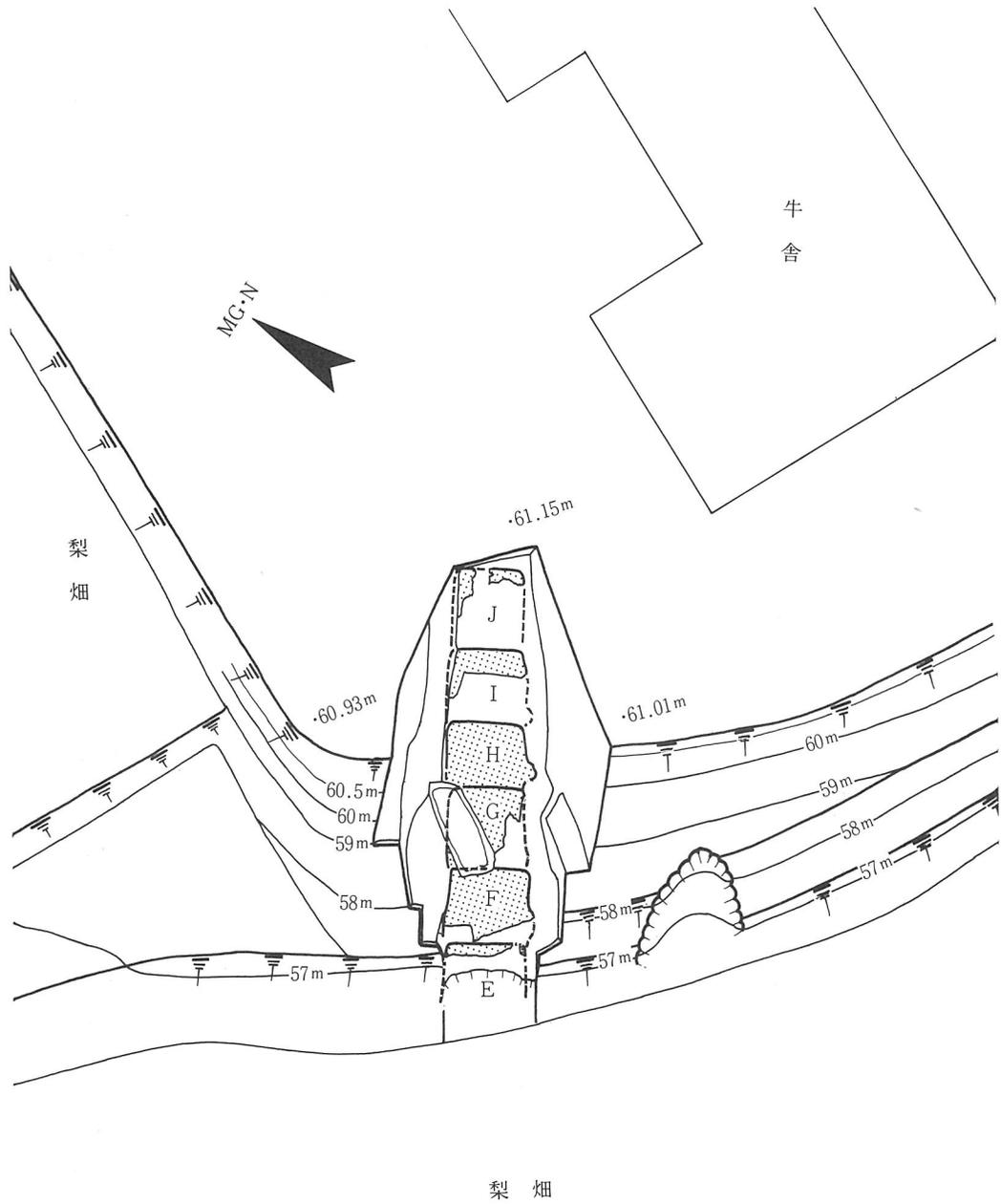


Fig.5 神谷寨跡地形図 (1/200)

2. 調査の概要

神谷窯跡は、優れた絵唐津を出土する名窯として著名であったが、その所在位置すら不明であった。これまで数回踏査したが、現況は旧地形から大きく変貌しており若干の陶片を採集したのみで窯体等の遺存を推測することは困難で、既に消滅したものと理解していた。今回の崖崩れが調査の契機となったのは、この窯のもつ学史的な意義からは幸運なことであった。

窯跡は、東から西に向かって標高をさげながら伸びる東西300m幅40mほどの丘陵の南側斜面にはほぼ丘陵の主軸と直交する状況で位置していた。窯の上位範囲は牛舎の敷地として平坦に造成され、下位にあたる範囲は緩傾斜の梨園として開墾されている。上位と下位との造成面の比高差は約6mに及びその斜面は急である。崖崩れによる窯床の発見がなければ現状の斜面の観察だけでは窯跡の位置の特定は不可能であり僅かに散乱している陶片により、ここに窯跡が存在したであることをかろうじて窺い知ることができる状況であった。

調査は露出した窯床の位置から窯主軸の方向が推察されたので、露出範囲を中心に11×4mの調査区を設定した。しかし、当初の予想以上に客土層が厚く検出作業は困難を極めたが、最下位で僅かに残る奥壁と砂床の一部を検出したので、それをE室とし、上位に移るに従いF～J室と呼称することにした。

発掘の結果、窯跡が棚田や畑地として利用されていたことや盗掘による破壊の為、全体的に遺構の残存状況は決して良好とはいえなかったが、F・H室では床面のほぼ全体と窯壁の一部を検出した。また、I・J室では砂床の3分の1と壁面を検出することができ、図上復原による当窯跡の構造や規模を知る手掛りとなる資料を得たが、上位及び下位の窯室の確認や物原の検出による焼造品の層位的変化等を追求することは調査区の制約等から出来なかった。

E室以下は梨園開墾により3m以上の削平を受けているとみられ、J室より上位は以前水田であったことから遺構残存の可能性は低いと考えられる。

E室では奥壁の一部と砂床の最奥部を検出した。F室では左側壁及び砂床が良好な状況で残存していた。G室では、盗掘による破壊が著しかったが砂床の中央部付近が残存していた。H室は最も残存が良く砂床・火床・焚き口、それに左右の側壁と奥壁面の下位部分が残存しており窯室内での火床と砂床の構成比や窯室の平面形態を知ることができた。I室は右側壁・奥壁の下位部分と砂床の3分の2ほどが残存していた。J室は、耕作による攪乱を著しく受けており砂床の一部と奥壁最下位の一部が残存していた。窯室は直線的に築かれており、その窯室法量はH室を除いてほぼ類似している。またF～J室の各々の砂床は斜めに造られており、各窯室間の高低差はあまりない。この窯の床面から出土した焼造品はほとんどなく、H室焚き口の床面で大皿が1点出土しているにすぎない。

出土遺物には、陶器と窯道具がある。陶器には、皿・甕を主に壺・播鉢・片口・徳利・碗・水指・蓋ものがあり、甕の底部には陽印や貝殻痕をもつものがある。窯道具には、トチン・トンバイ・火覗き穴の蓋があるがハマは出土していない。

III. 遺 構

神谷窯跡は、果樹園の急傾斜地面下に立地しており、耕作や盗掘による攪乱が著しく遺構の残存状況は良好ではなかった。

検出された遺構には、階段状連房式登窯の窯室6室分があり、下位の窯室からE～J室の呼称を付した。すべての窯室は壁面や砂床の破損を受けていたが、H室のみは砂床・火床及び焼成室前面右側の焚き口の床面が残存していた。しかし温座の巢（通焰孔）が残るものはなかった。

E室の奥壁面から、J室の奥壁面までの主軸線上での水平距離は10.5m、窯体の傾斜角度はF～H室間で17°、H～J室間で20°平均勾配は18°であり、E室の砂床最上端とJ室の砂床最上端との比高は3.5mを測る。

窯室のうち、E室の大半とそれより下位の数室分は梨園により破壊されている。また、J室の砂床直上は旧水田面であり、これにより上位に窯室が残存している可能性も低い。E室の奥壁部下端の標高は約56.4mで、J室の奥壁部下端の標高は約59.9mである。当窯跡はFig 6の通り比較的急な丘陵の南斜面に、丘陵の主軸方向（等高線）に直交するように築かれており、その主軸はN-50°-Eで直線状に南西から北東に向かって登っている。尚、今回の調査では調査区の制約等から物原・排水溝・通路及びその階段・覆屋の柱穴跡等の付属する遺構は検出できなかった。

各窯室の規模はTab 1の通りで、F室からJ室に至るまではほぼ同規模で構築されている。これを床面積で（火床部分を含めた）みると、E室では4.67㎡、J室では4.24㎡であり、やはり近似した法量であることが理解できる。

各窯室の平面プラン（復原値を含む）を見てみると窯室の最大幅は窯室プランの中央部にあり、各窯室の窯室長と窯室幅の比はE室1:1.14、F室1:0.96、H室1:1.27、I室1:0.99、J室1:0.82でその比は1:0.8～1.14の範囲に含まれ、正方形からやや主軸方向に長い長方形の平面プランをしていることが理解できる。壁面はすべて塗り壁によりつくられ、コーナー部分は隅丸形状である。壁体にトンバイや礫の使用は認められなかった。また、砂床横断面の観察からも窯体の造りかえも認められなかった。

砂床は凹凸がなく均一にならされており、火前から奥壁に向かって傾斜角9～14°の角度で造られている。検出した6室のうち上位2室の砂床面の傾斜角が下位2室の傾斜角度に比較して小さい。これは上位が窯尻に近接する窯室であり、火押さえの為に砂床の傾斜角度を緩くしているとも考えられる。

火床はH室のみで検出され、全床面積の約24%が火床面積である。全窯室の火床と砂床の比を図上復原値より算出すると19～25%の範囲に含まれ、全床面積の約4分の1ほどが火床であることが推測できる。焚き口もH室右側（東）で検出しており、物原は窯主軸に向かって右側一帯と推定され現況の表面観察と符合している。

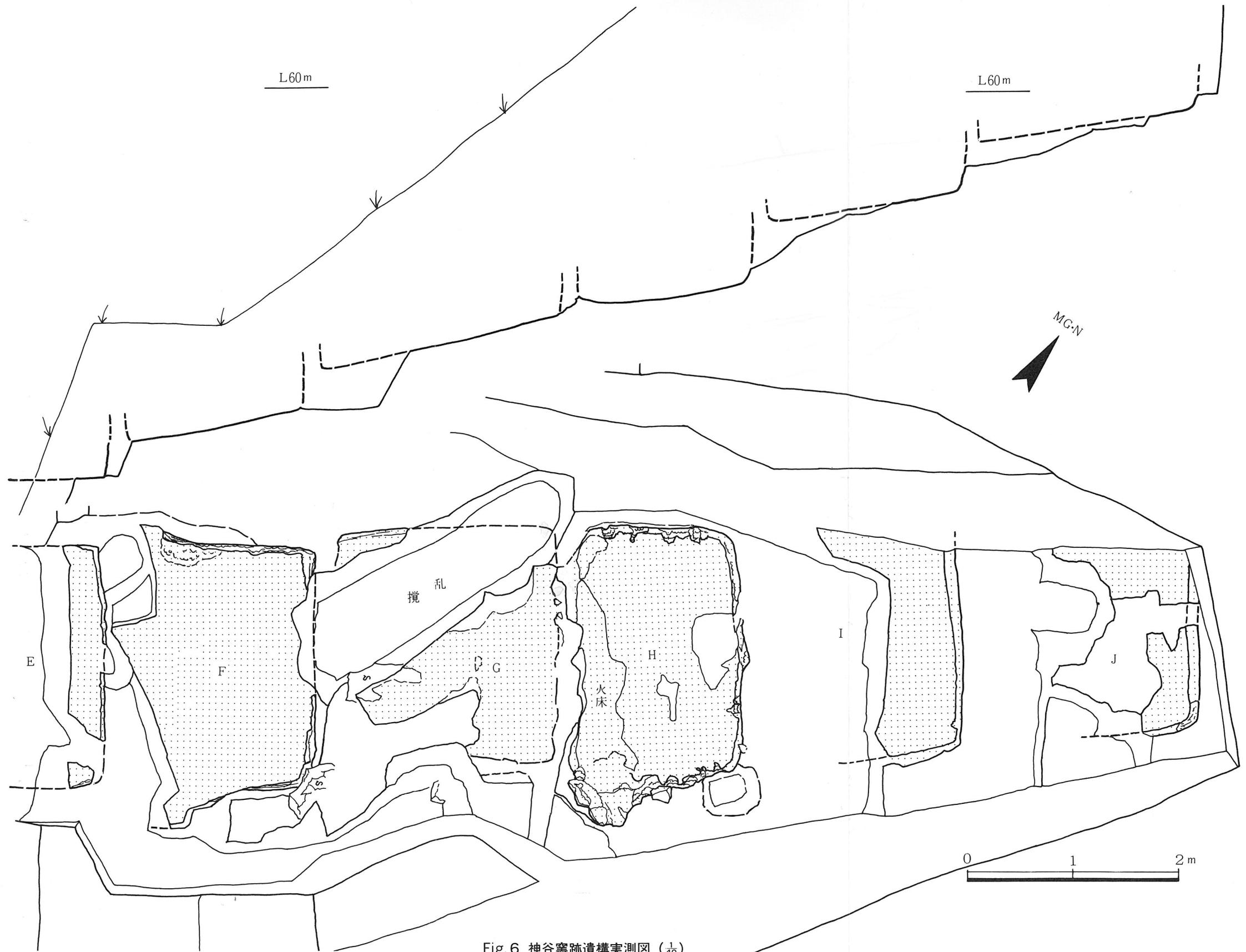


Fig. 6 神谷竈跡遺構実測図 (1/40)

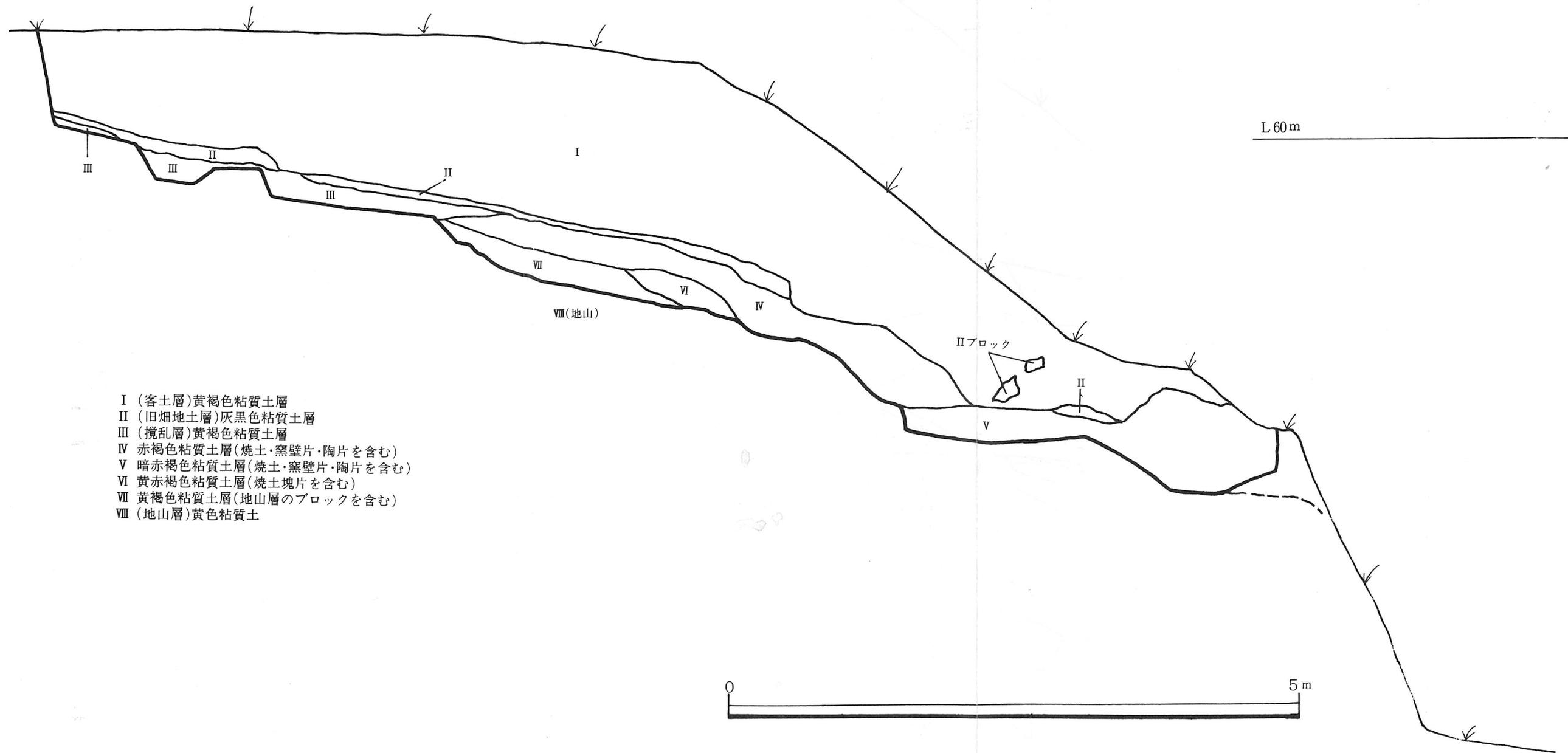


Fig.7 神谷窯跡調査区東壁土層断面図 (1/40)

E室は、大半を削り取られており、奥壁部と砂床の一部が検出されている。奥壁左半部の残存高23cm、砂床の残存長30cmである。

F室は、横長の方形のプランを示し、窯室長202cm、窯室幅231cmほどで火床部分及び奥壁の左半部、右側壁は破壊されていた。しかし左側壁の残存高は41cmで垂直に良好な状態で検出され一部には壁土の塗痕があった。砂床は左右に平らにならされ、12°の勾配で築かれている。奥壁の左半部は破壊され右奥壁部での残存高は19cmであった。

G室は長方形プランを示しこの窯の中では最も大きな窯室である。砂床の中央部付近が残存しているだけではあるが復原窯室長230cm、同幅221cmである。砂床は14°の勾配で築かれていた。

H室は窯室の中で最も遺存状況の良好な窯であり、横長の方形プランを示し、窯室長180cm、同幅229cmで火床・砂床・奥壁・左右側壁・焚き口が残っていた。奥壁及び左右側壁の残存高は14~23cmで、壁面が固くガラス化していた。火床は復原長60cm、幅210cmほどで砂床との境の段差及び火床境の明瞭な痕跡もなく直接砂床へと連続していた。砂床は10°の勾配で築かれ左右は平である。この窯室のみで右側壁から外へ30cmほど張り出した焚き口部を検出した。焚き口部と火床面とは20~22cmの差があり、焚き口の間口幅は45cmほどで、その床面は火床面へ向かって緩かな傾斜をもって築かれていた。

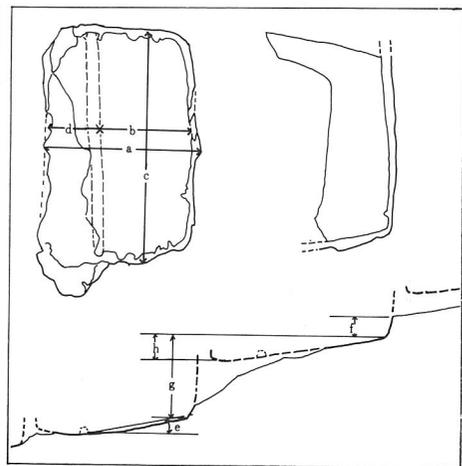
I室は前半部を破壊されており、右側壁と砂床の後半部及び奥壁の一部が残存していた。平面プランを図上で復原すると窯室長212cm、同幅210cmのほぼ正方形である。砂床の残存長は左壁側で110cm、右側壁では70cmほど残存していた。砂床は全体にならされており床面の凹凸はなく、図上で復原すると約9°の勾配で築かれていたと推定される。右側壁は残存高26cmで壁面はよく焼けて固化している。奥壁面は中央部で24cm残存していた。

Tab 1 窯室計測値 (単位メートル)

窯室名	a	b	c	d	e	f	g	h	窯室面積 ㎡
E	—	—	(2.26)	—	—	0.30	0.62	—	—
F	2.02	(1.30)	2.31	—	12°	0.30	0.90	(0.26)	4.67
G	(2.30)	(1.60)	(2.21)	—	14°	0.16	0.31	(0.42)	5.10
H	1.80	1.00	2.29	0.60	10°	0.13	0.87	0.20	4.12
I	(2.12)	(1.40)	(2.10)	—	(9°)	0.26	0.78	(0.22)	4.45
J	(2.28)	(1.65)	(1.86)	—	(10°)	—	—	(0.22)	4.24

- a 窯室平均長 f 奥壁の残存高
b 砂床平均長 g 奥壁面下端から次の窯室の奥壁面下端までの高さ
c 窯室平均幅 h 火床面から奥壁下端までの高さ
d 火床平均長
e 砂床の傾斜角

() は図上による復元値



J室もI室と同様に窯室の前半部は、攪乱を受けており、辛うじて右奥壁部の隅の部分の最下位が残存していた。左側壁側では砂床の一部を検出した。右奥壁部の残存高は11cm、奥壁の中央部での残存高は16cmである。砂床の最も残存している左側での砂床残存長は130cm、右側での砂床の残存長は最も広いところで40cmである。砂床は均一に整形されており床面の凹凸はない。この窯室を図上で復原すると窯室長228cm、窯室幅186cmで、主軸に沿う長方形のプランであると考えられる。同様に床面を復原するとその勾配は約10°になる。

IV. 遺物

出土した遺物には陶器と窯道具がある。陶器の器種には甕・壺・皿・播鉢・碗・徳利・片口・水指・蓋等がある。窯道具にはトチン・トンバイ・火覗き窓の蓋がある。

1. 陶器 (Fig 8～31)

陶器片は全体で5700点(コンテナ30箱分)ほど出土しているが、ほとんど攪乱層からの出土であり遺構に伴ったものは数点に過ぎず全体に小片が多い。器種は、最も多いものが甕であり次いで鉄絵(絵唐津)の皿類が多くこの二種で全体の九割弱を占めている。少ないものには播鉢・徳利・壺・水指・蓋物がある。甕・壺・徳利は鉛釉(鉄釉)が多く播鉢には鉛釉・長石釉がある。鉄絵(絵唐津)の皿類(鉢)や碗は石英分の多い長石釉が多く、無地唐津の皿には土灰釉のものが数点ある。

皿(絵唐津皿)(Fig 8～18)

皿には口縁部径35～42cm、底部径9～13cmほどのもの(大皿・Fig 8～12)、口縁部径16～18cm、底部径5～6cmのもの(中皿・Fig 13・14)、口縁部径13～14cm、底部径4～6cmのもの(小皿・Fig 15～16)との概ね三種に区分できる。器形はいずれも胴部上半が「く」の字形に屈曲する段付きの形態がほとんどで、他には口縁部がほぼ垂直に屈曲するものFig 10-8や、口縁部がゆるく外反するものFig 12-16・17がある。すべて高台は露胎で高台脇や高台内にヘラケズリ痕が残る。大皿では高台脇から上方に5～6cm、中皿では3～4cm、小皿では2～3cmにわたってヘラケズリを行なっている。高台はほとんど左回轉轆轤で削り出されており、中・小の皿では高台内に縮緬皺があり兜巾になったものが多い。胎土は鉄分の多い粘土で細かな砂粒を含むが全体に精良であり、焼成は良好である。肉眼による観察では器種の大小による胎土の差異はない。筆致は伸びやかで優れたものが多く、絵柄には草花文・草文・松文・波に千鳥などがあり、なかでも草花文や松文が多い。釉は長石釉が多く比較的透明で器体の色調は黄灰白色や灰緑色がほとんどである。内面見込みに重ね積みの為の目積みをもつものがある。Fig

9-6・Fig10-10は大皿で小石を利用しているが、中小の皿は胎土目が多い。Fig16-35は小皿の重ね焼きを知ることのできる資料であり、1枚の皿に3個の胎土目を使用している。Fig 8-3はH室横焚き口で出土した大皿で、口縁部径42cm、体部はやや内彎しながら外へ広がり、口縁部は外反して口唇部はまるくおさめられ、上端が僅かにつまみあげられている。胴部内面には胴部と区別する僅かな段差がみられ、鉄釉で描いた草文の上に長石釉をかけてある。色調は灰白色であり、胎土は良好で焼成も良い。外面下半は露胎で茶褐色である。Fig15-28は表採資料の小皿で底部径4.8cm、胴部に屈曲をもつ。見込みには草花を描いている。釉調は良好で灰白色をしている。三日月高台で胎である。

甕 (Fig19・20)

甕には、口縁部径が40～47cmで口縁部外面に幅1cmほどの凹線を二・三条廻らして突帯状の隆帯を廻らす大型のものFig20-58～60、同様に隆帯を廻らす口縁部径が29～31cmほどの中型のものFig20-62～66、口縁部径が18～23cmで口縁部下から胴が膨らむものFig19-54・55、口縁部径18～21cmで口縁部からやや膨らみながら底部にうつる小型のものFig19-51・53、Fig20-61等がある。Fig20-58～60の大型品を除いてほとんど内面に叩き造りによる青海波文状の円形の叩き目痕を残している。口唇部は折り返しにより造られたものが多く、殆ど鉄漿や鉛釉がかけられており褐色あるいは黒褐色である。胴部中央には、一・二条の凹線か指押えによる隆帯をもち、底部にはFig32のような陽印をもつものがある。Fig20-60は、復元口縁部径47cm、口縁部はやや内彎し、端部は平縁である。外面には4条の突帯をもち、内外面とも水挽きによるヨコナデ調整である。無釉で茶褐色をしており、胎土は精緻で焼成も良く焼き締まっている。Fig19-55は、復元口縁部径21cmで、口縁部下から胴が張り内面には青海波叩目が残り、外面は轆轤目痕が残る。

壺 (Fig24)

壺には口縁部径が11～13cmで口唇部が玉縁状に丸くおさめられ、頸部がほぼ垂直に立ち上がり、胴部が球形に膨らむものFig24-84・85、と口縁部径が10～13cmで口縁部直下から胴部が膨らむものFig24-86～90がある。Fig24-85は復元口縁部径13.4cm、口唇部は丸く肥厚させている。内外面とも右回転で水挽きによるヨコナデ調整である。内外面とも鉄漿が塗られ褐色である。胎土は灰色で精緻、焼成も良好である。この形態のものには肩部にFig28-114・115のような紐かけ(耳)がつくものと考えられる。

片口 (Fig21)

片口には、注ぎ口が嘴状のもの、筒状のもの、口縁部を若干つまみ出して注ぎ口としたものの三形態が出土している。いずれも口縁部径17～24cmである。Fig21-67は復元口縁部径17cm、口唇部は肥厚させており胴部はやや膨らみ、幅5cmの嘴状の注ぎ口部をもつ。内外面には斑に鉛釉がかけられている。

播鉢 (Fig22・23)

播鉢には、復原口縁部径が23～35cmで胴部が僅かに膨らむものFig22-73、外に向かって開くものFig22-72・77の二形態がある。底部が高台造りになったものではなく碁笥底風のものFig23-78～81とベタ底風(平底)のものFig23-83とがある。口縁部の内外面や胴部上半のみ土灰釉や鉛釉を施釉したものがある。口唇部の造りは定形化したものではなく、様々な形態のものがある。内面の条痕は4～8条を一単位としたものが多い。全体に焼成は良好で褐色～黄褐色、胎土は精良である。Fig23-80は底径8.7cmで胴部外面上半部は土灰釉を施している。高台は碁笥底風で畳付脇から上位4cmにわたって左回転轆轤によるヘラケズリ調整をしている。

徳利 碗 水指 その他 (Fig25～29)

Fig25・26の徳利には鉄漿Fig26-99や鉛釉のものFig25-96が多く内面肩部以下には青海波叩目が残る。Fig27-102は土灰釉の筒形の碗である。Fig27-102～113は底部径4.2～5.6cmの碗で土灰釉・鉄釉を施すべて高台は露胎である。Fig26-100は復原口縁部径20.6cmの矢筈口水指である。この他、径15cmほどの水指の蓋や把手片が出土している。

2. 窯道具 (Fig30～31)

Fig30-127～134は中皿～小皿用のトチンである。上下に高台痕が残る。Fig30-135～38 Fig31-139・140は大皿用のトチン。Fig31-142～144は窯体に使用したトンバイである。Fig31-141は火覗き穴の蓋で厚さ10.5cm中央に深さ6.5cmの穴が途中まで穿ってある。

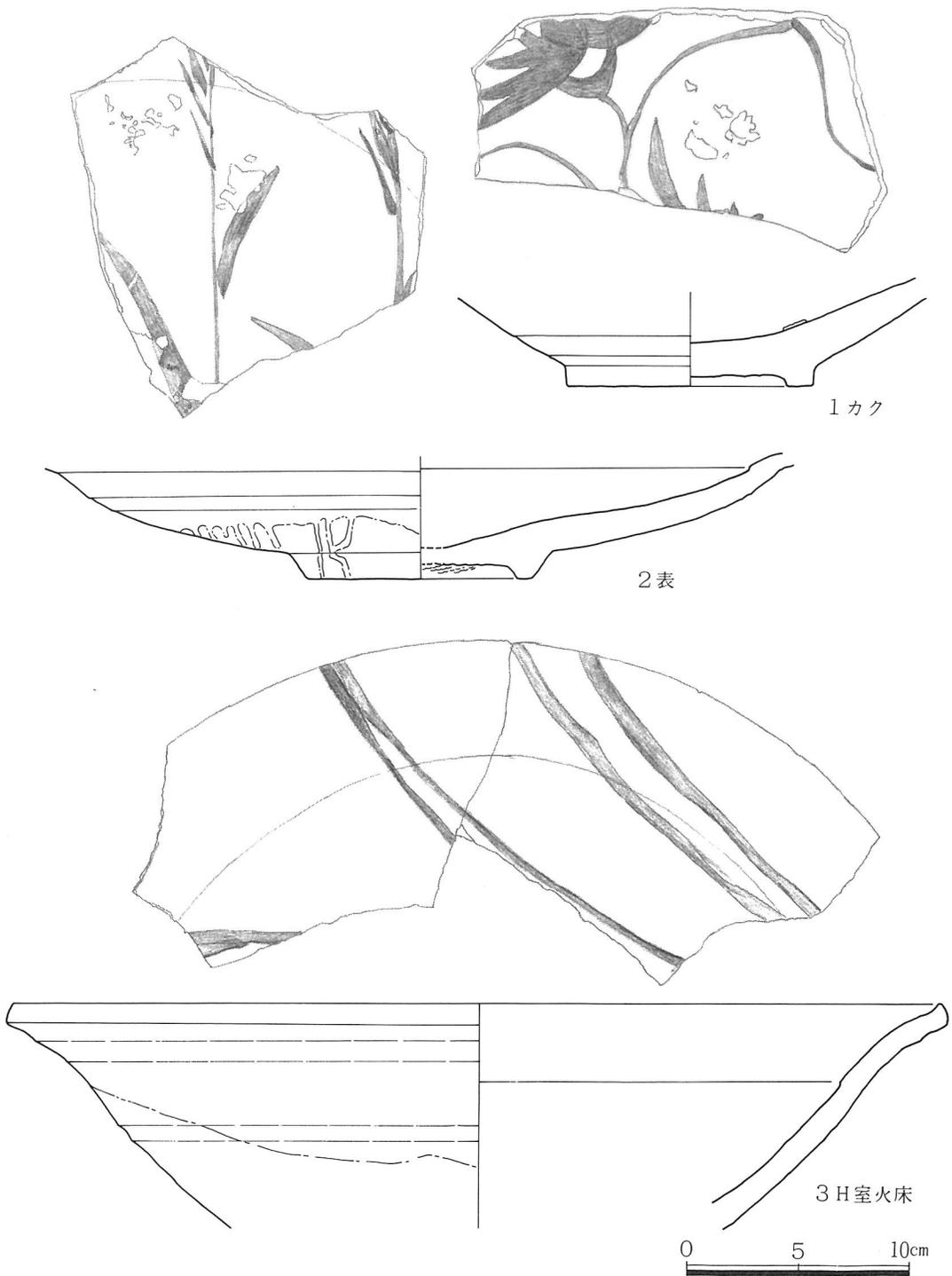


Fig. 8 神谷窯跡出土遺物 (鉄絵皿)

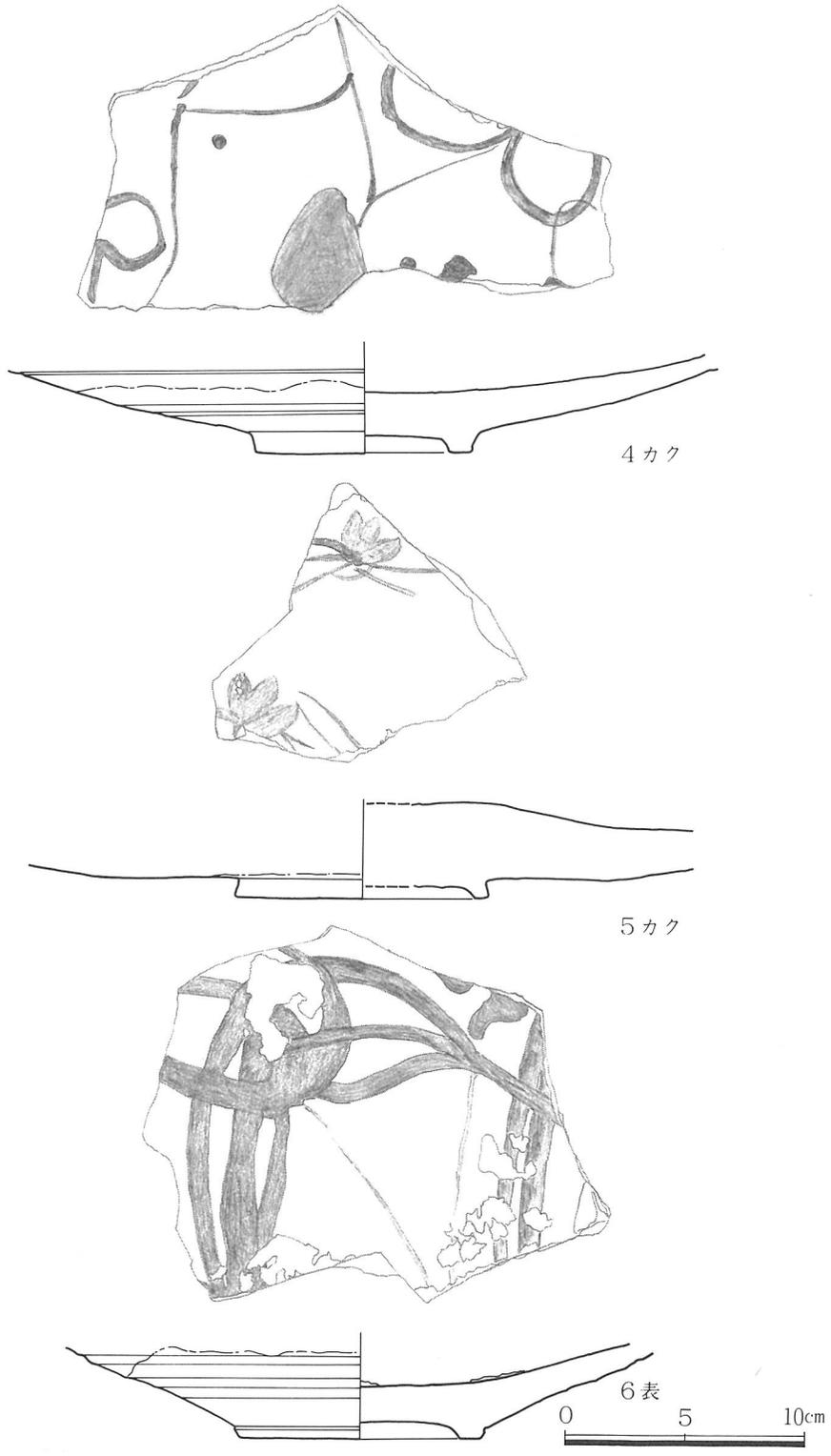


Fig. 9 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）

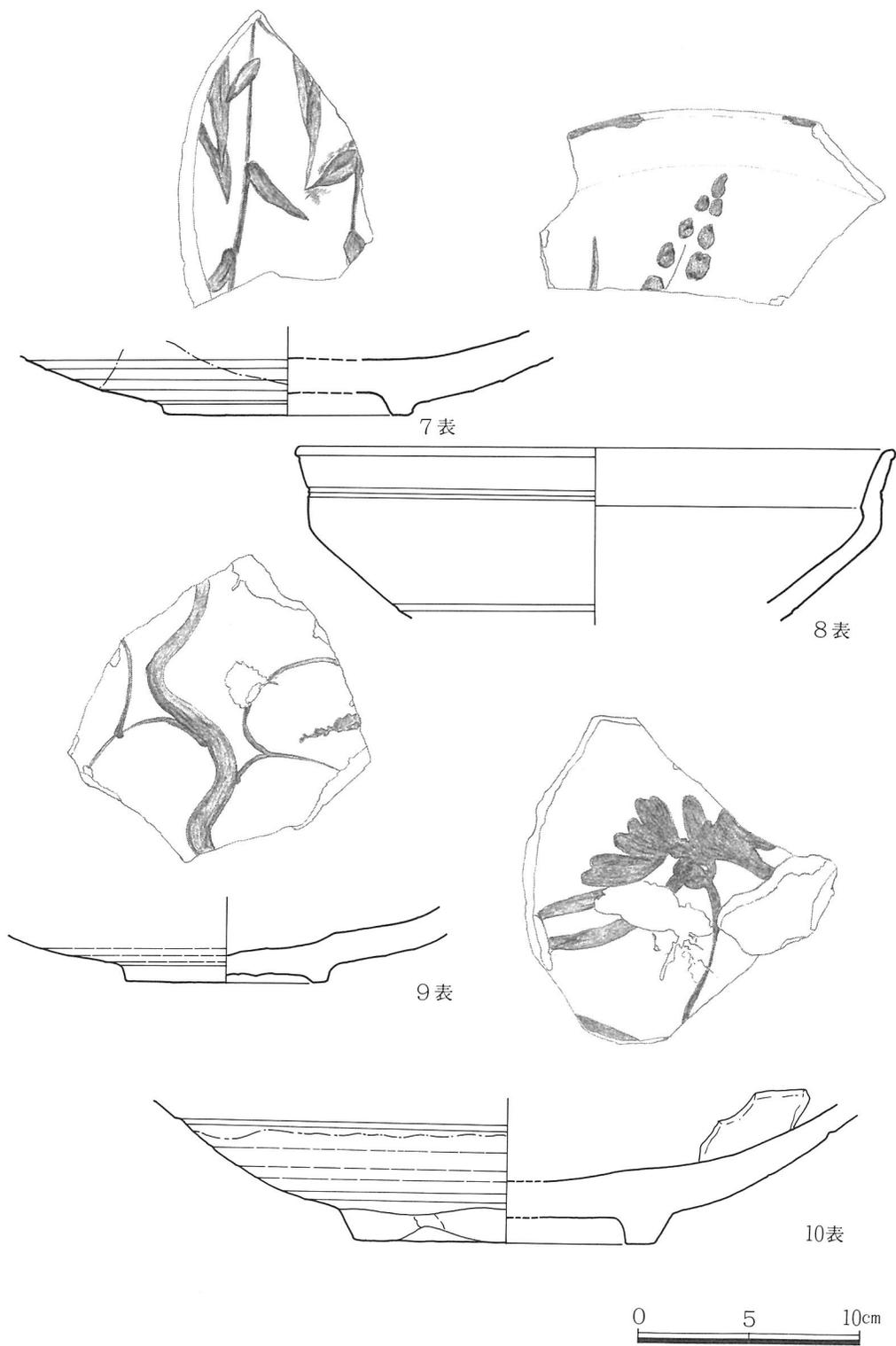


Fig.10 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）

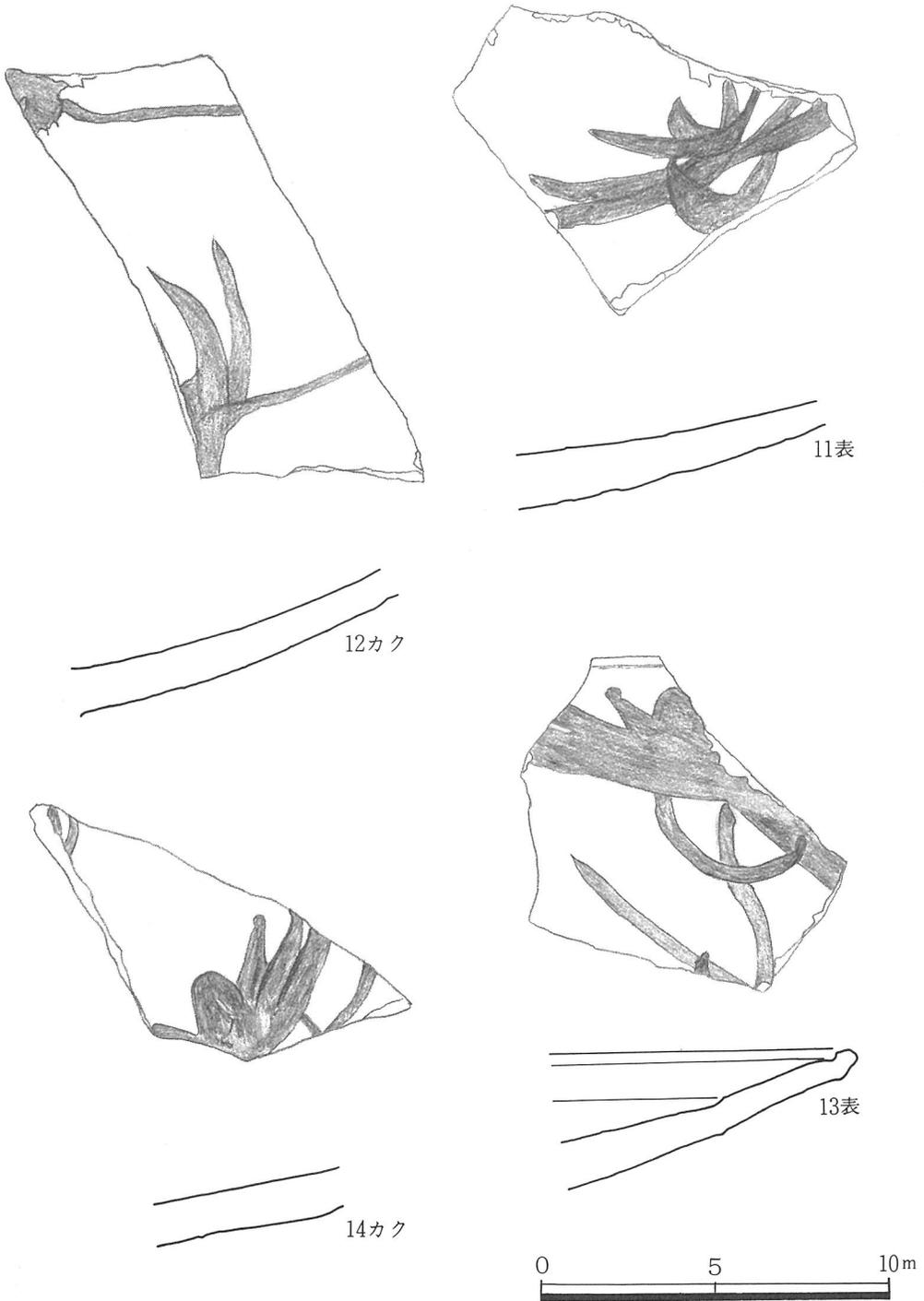


Fig.11 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）

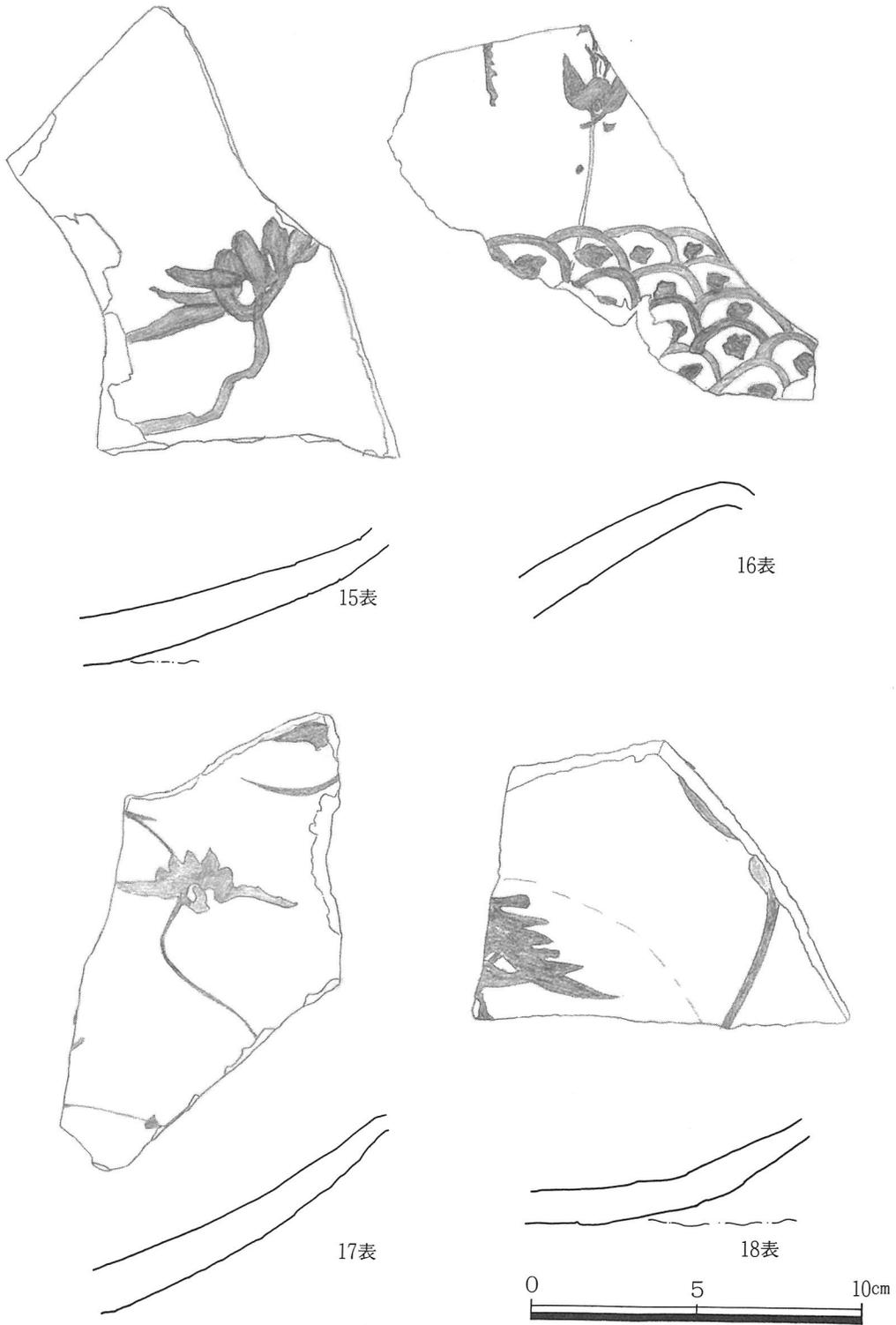


Fig.12 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）

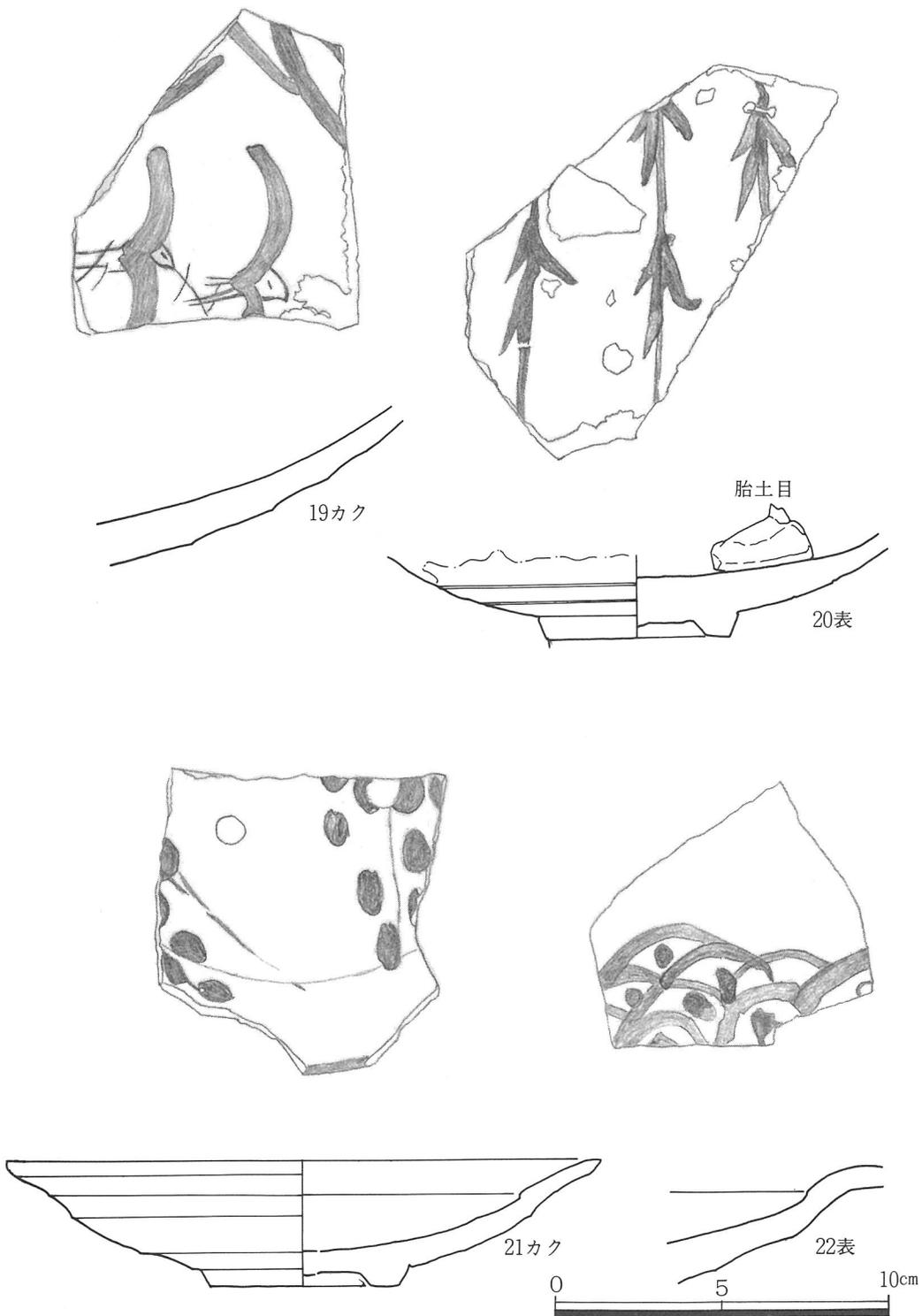


Fig.13 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）

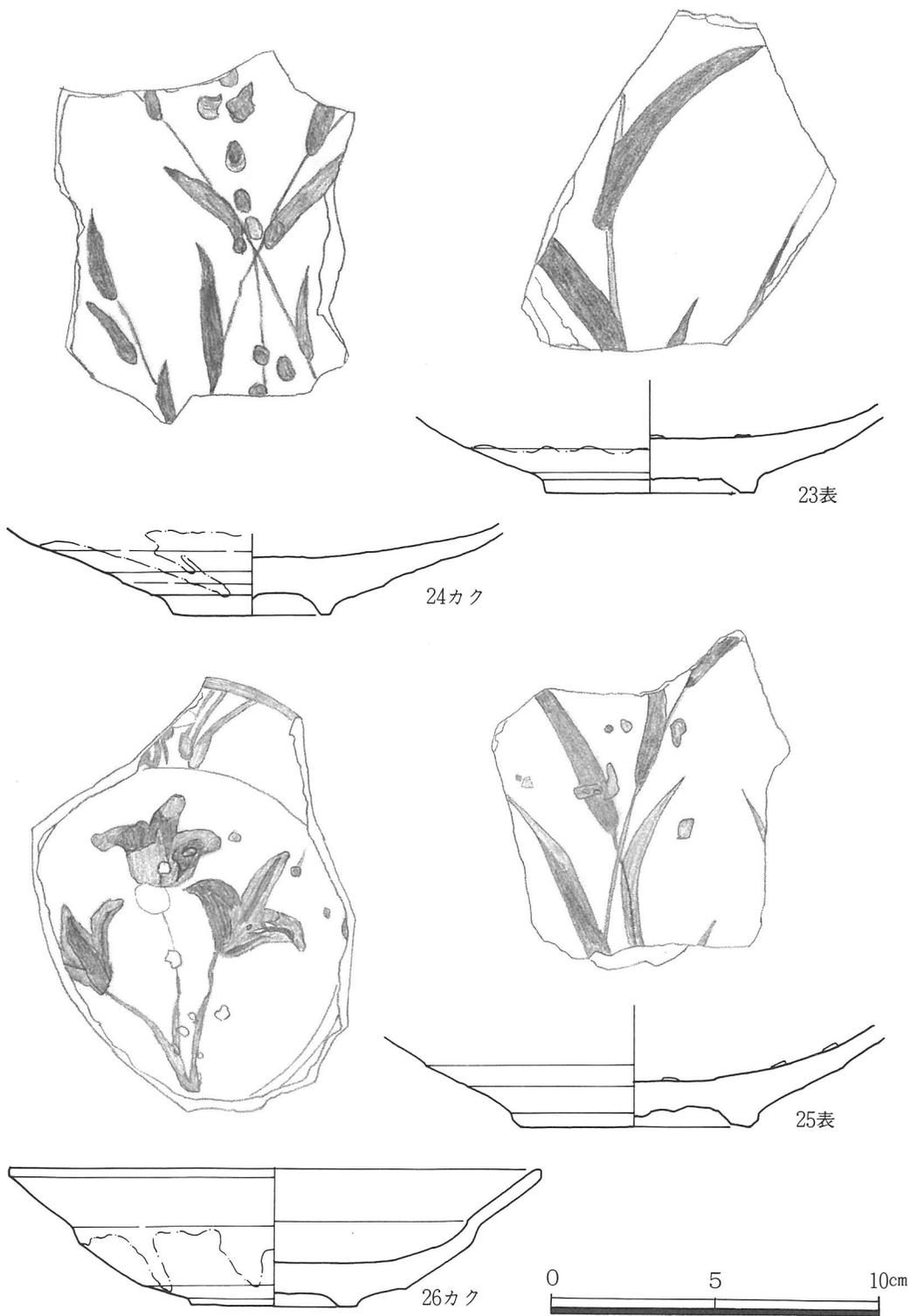


Fig.14 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）

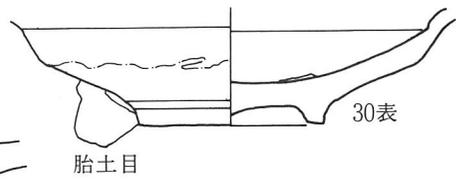
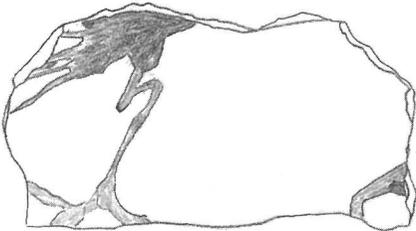
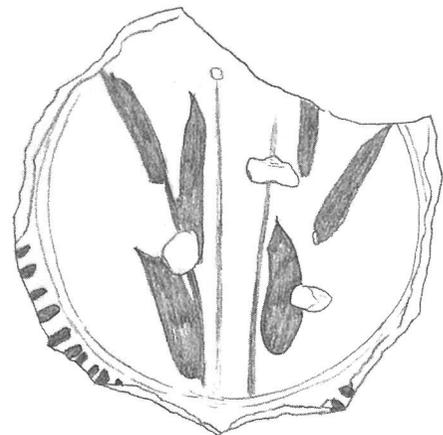
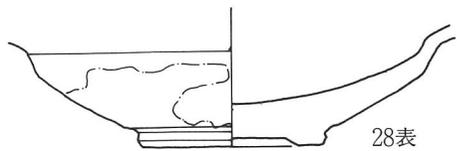
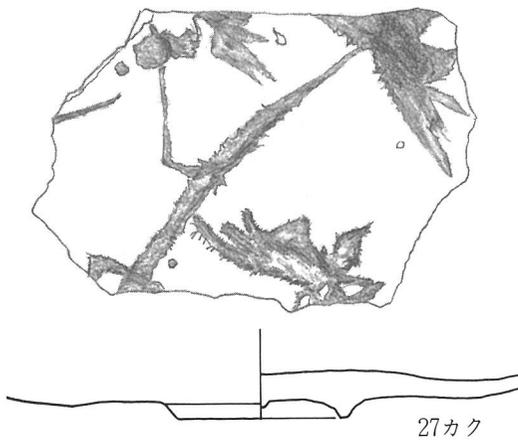


Fig.15 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）

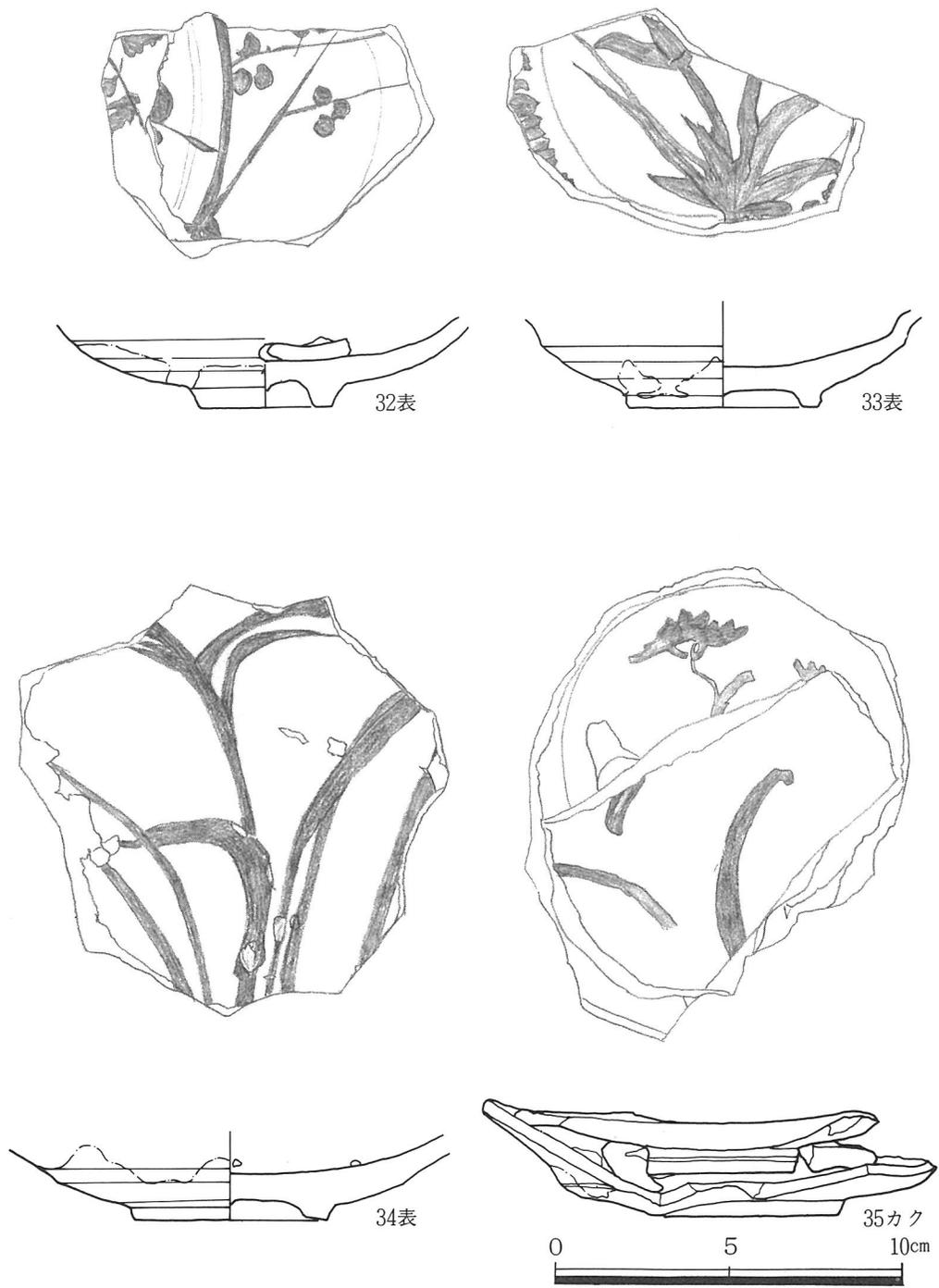


Fig.16 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）

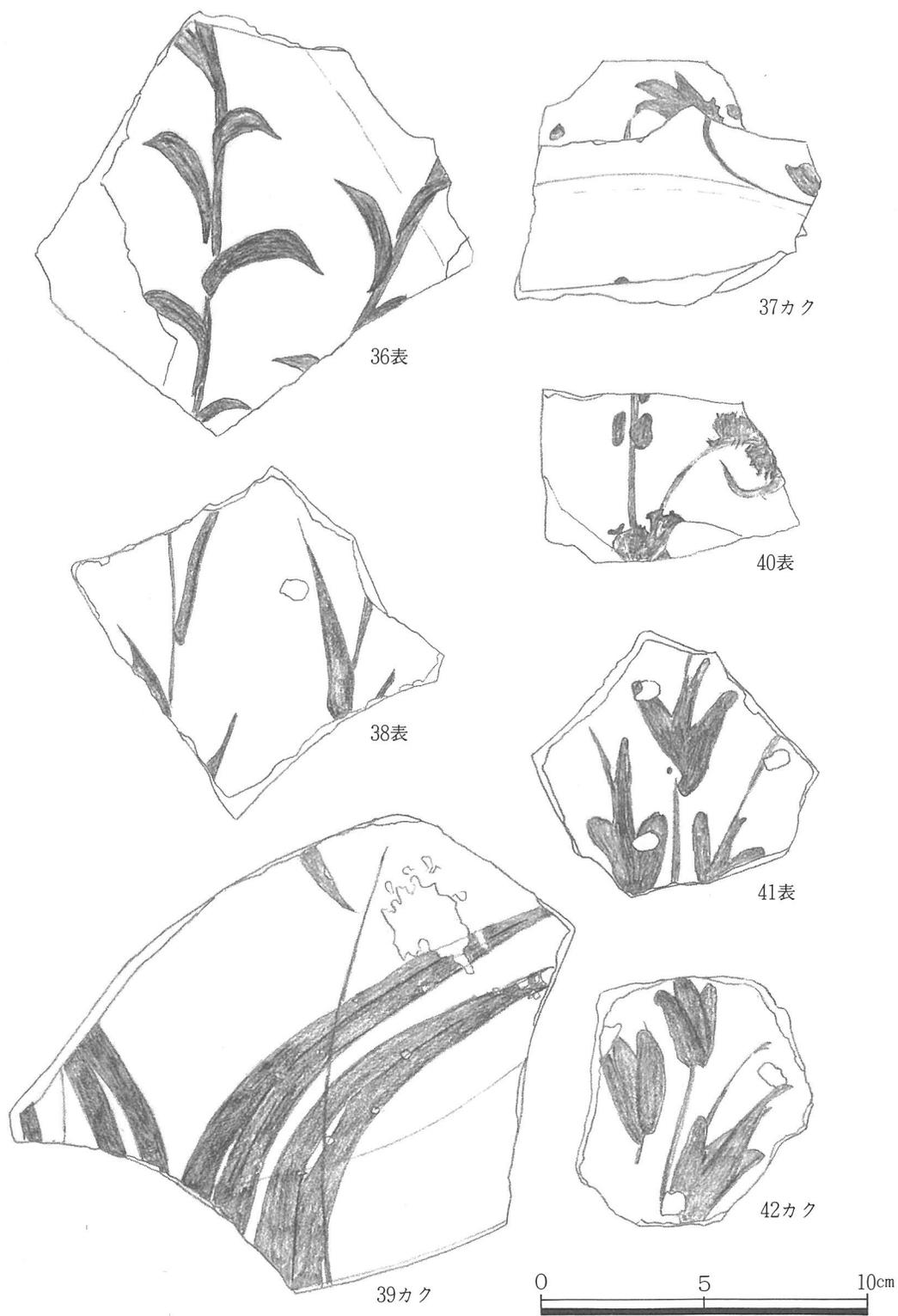


Fig.17 神谷寮跡出土遺物（鉄絵皿）

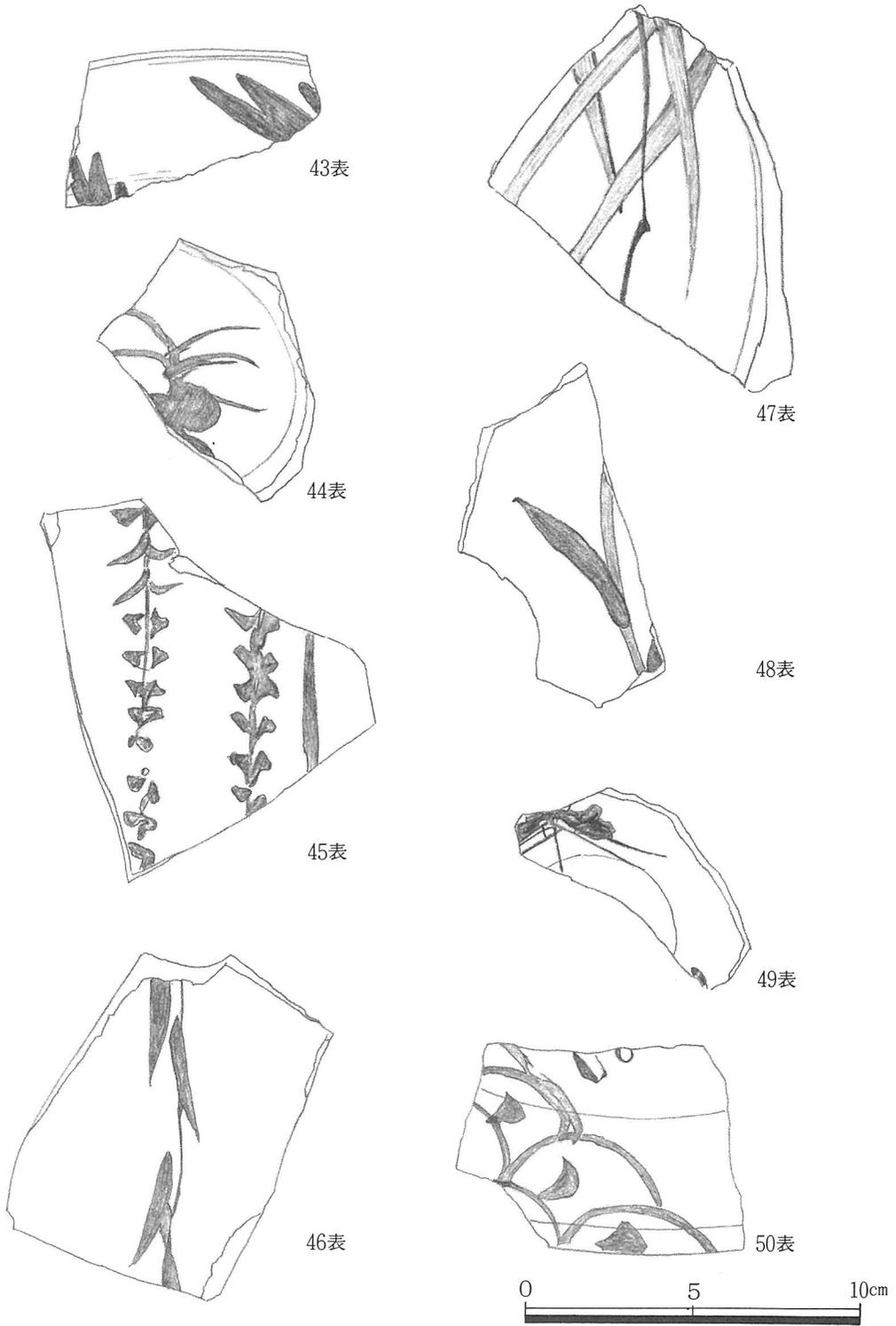


Fig.18 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）

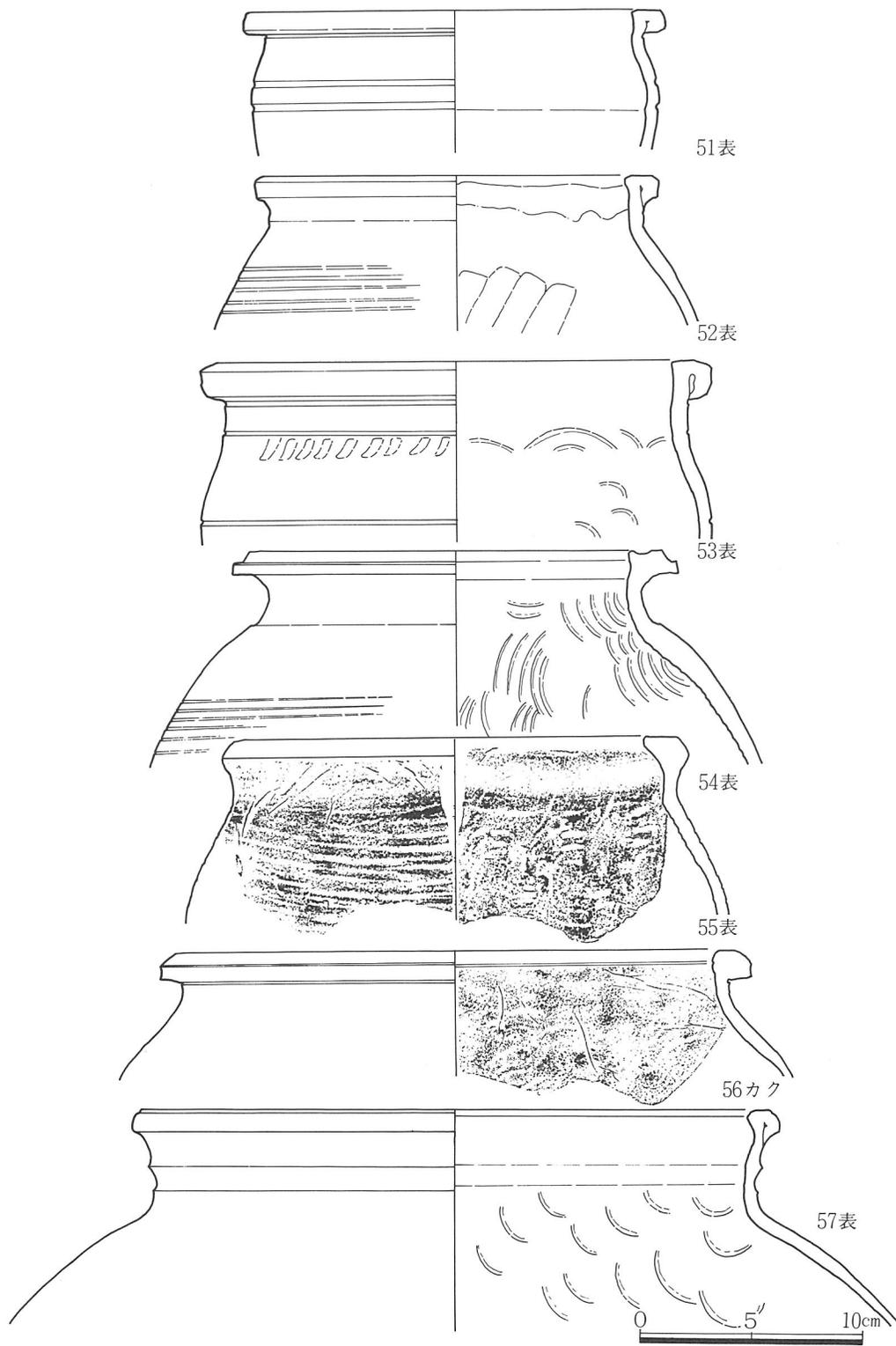


Fig.19 神谷窯跡出土遺物（甕）

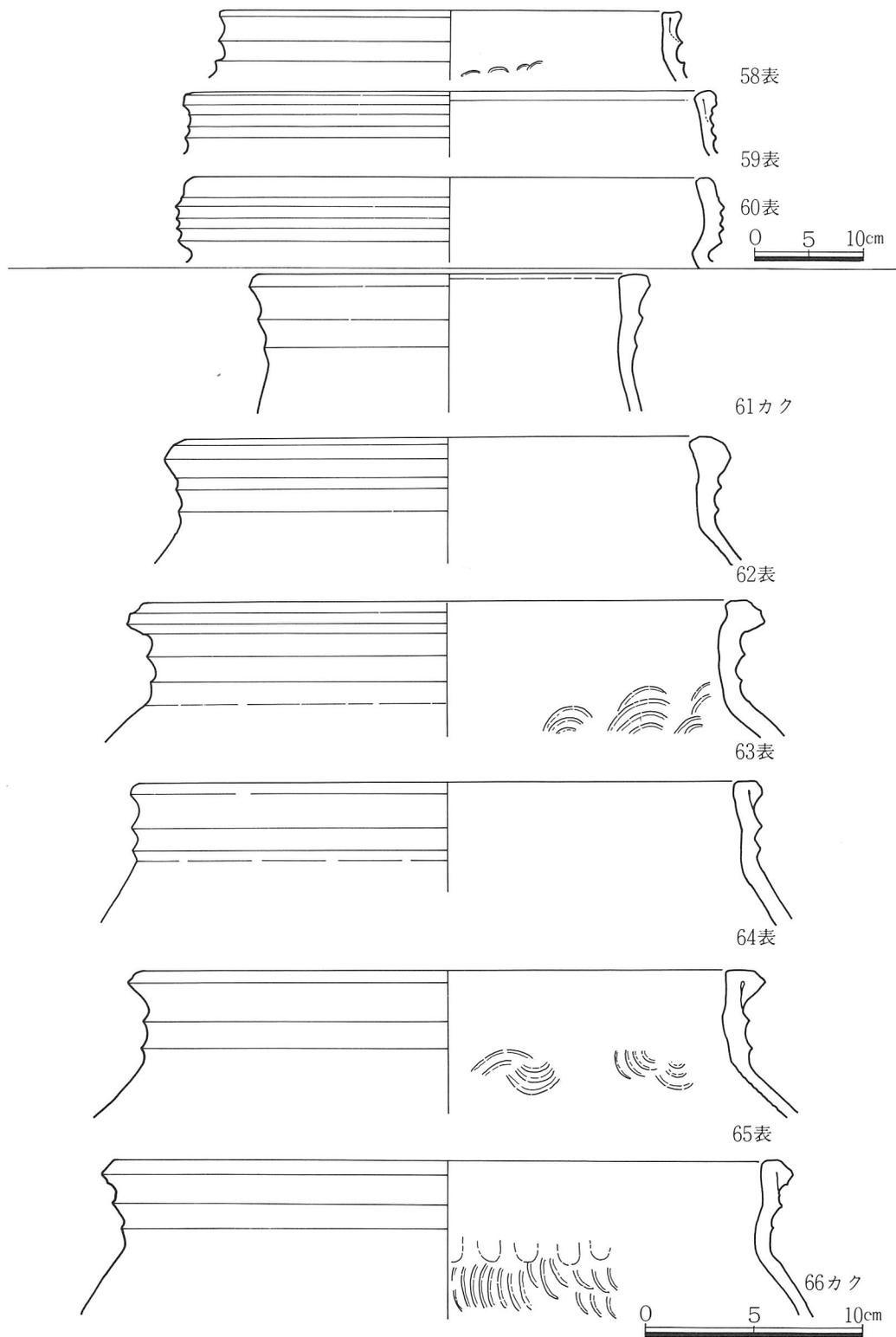


Fig.20 神谷窯跡出土遺物 (甕)

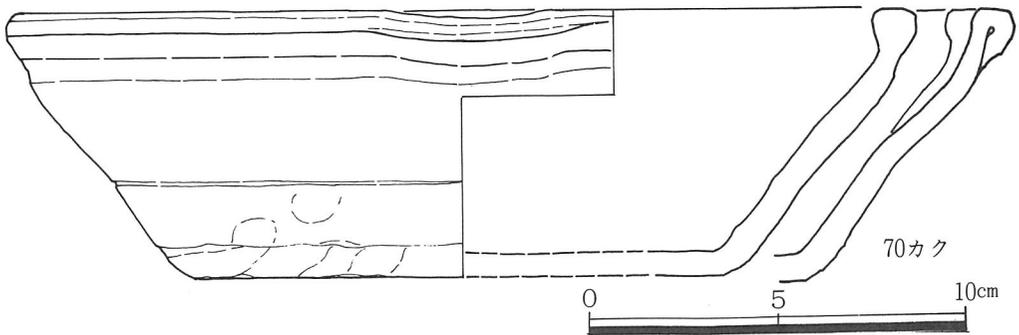
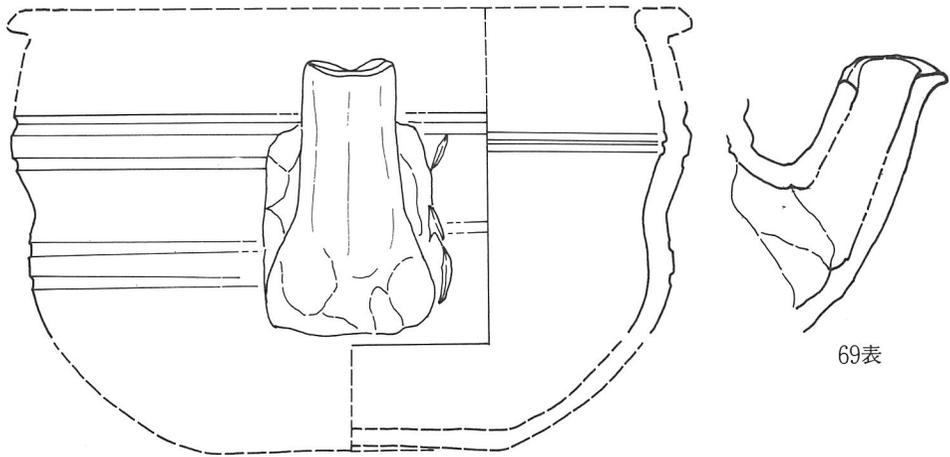
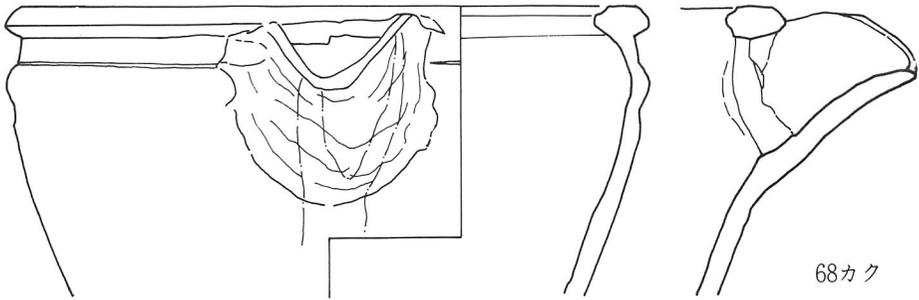
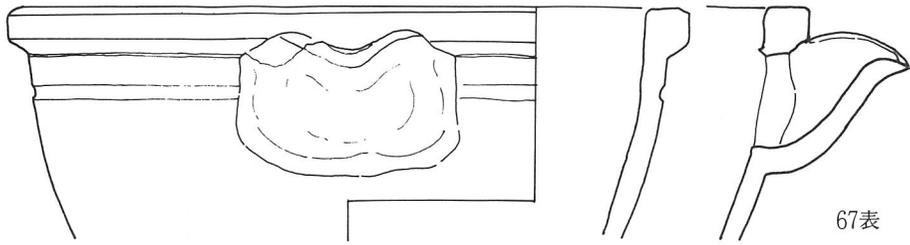


Fig.21 神谷窯跡出土遺物 (片口)

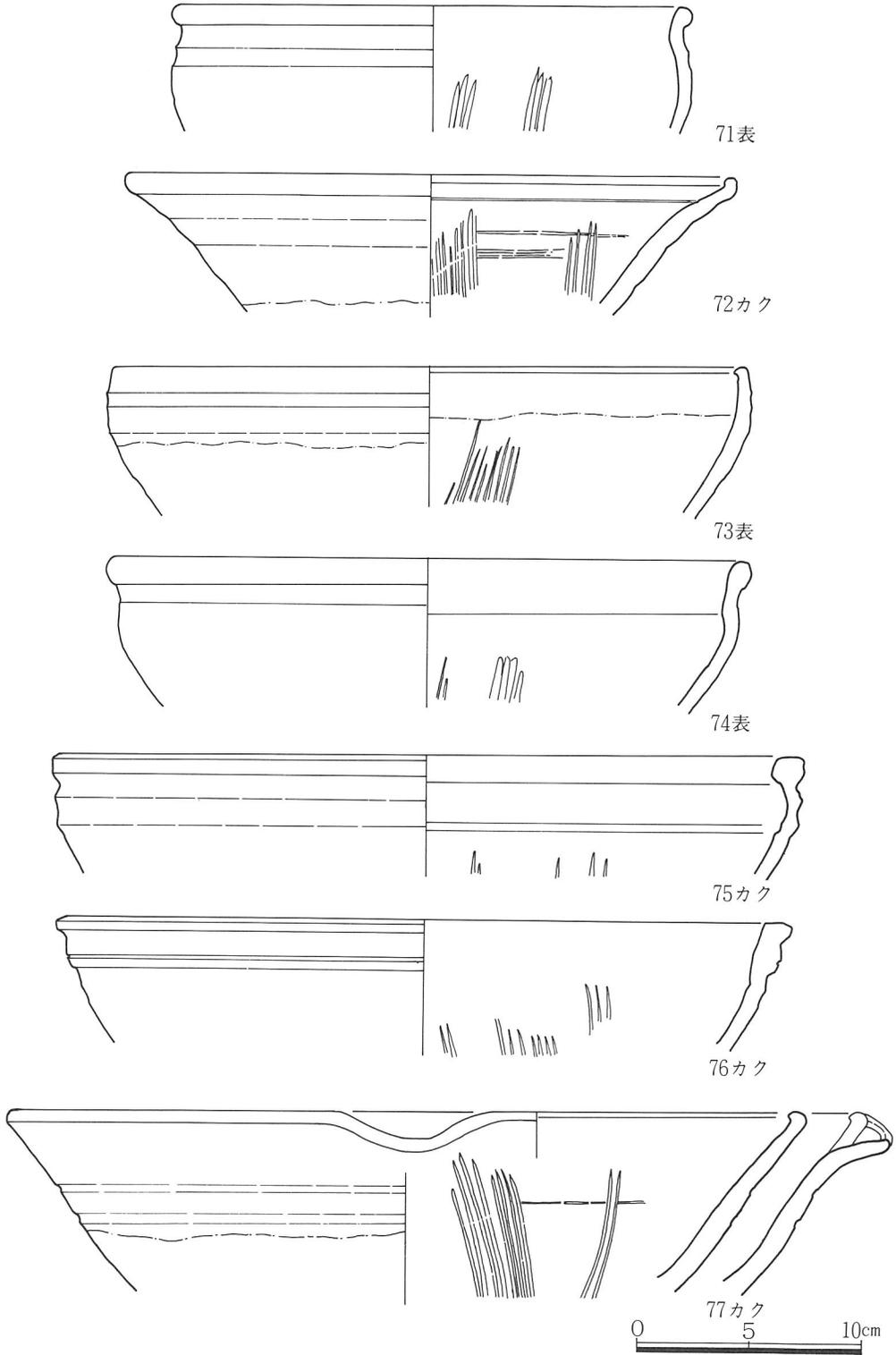


Fig.22 神谷寮跡出土遺物（播鉢）

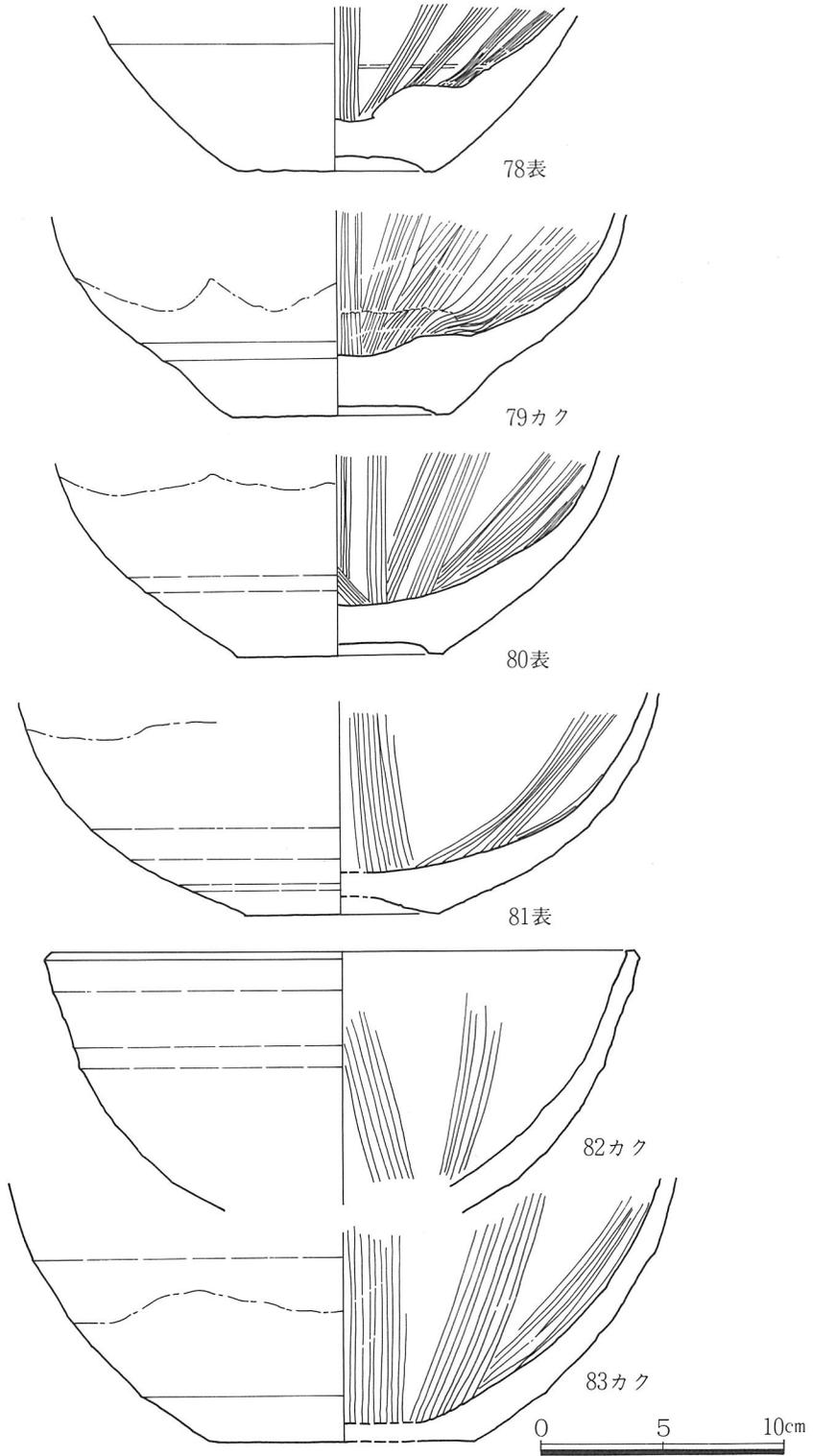


Fig.23 神谷窠跡出土遺物（播鉢）

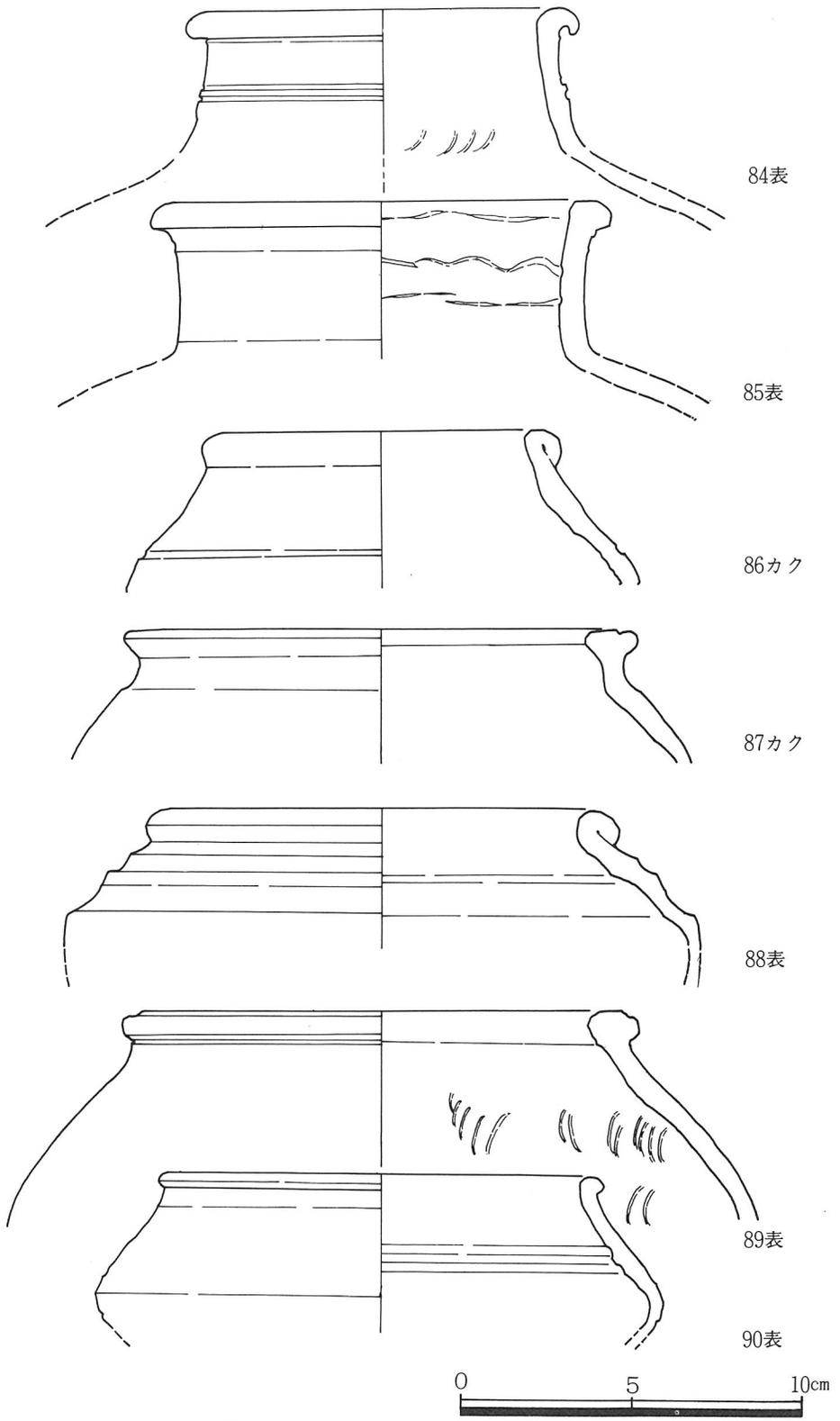


Fig.24 神谷窯跡出土遺物 (壺)

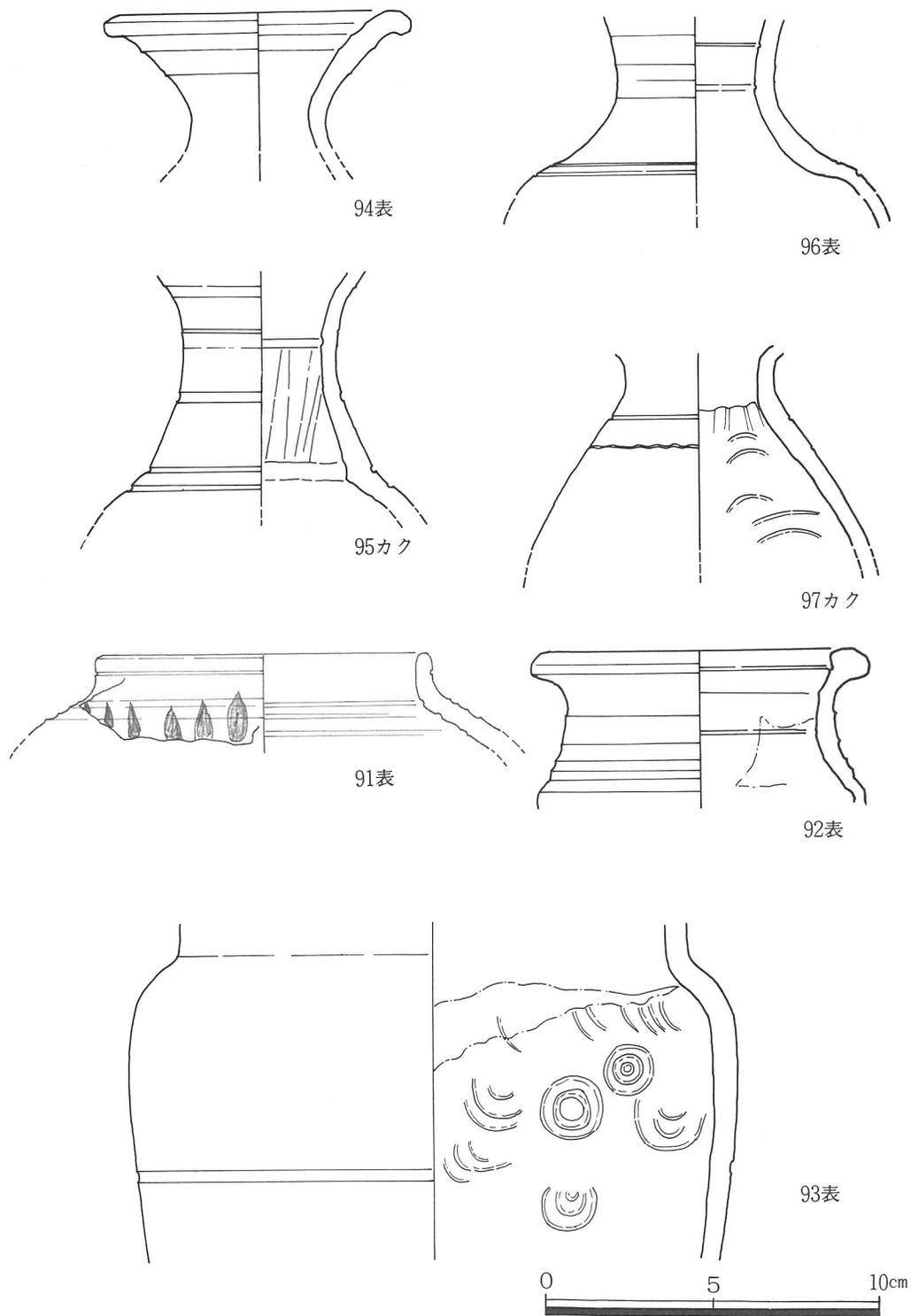


Fig.25 神谷窯跡出土遺物 (壺・徳利)

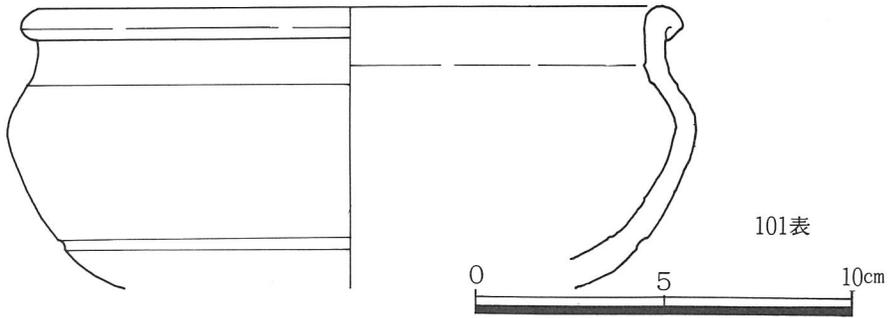
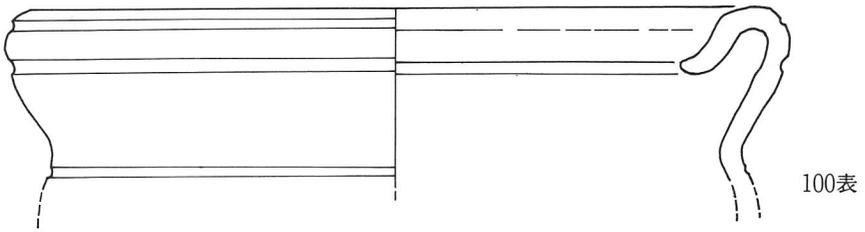
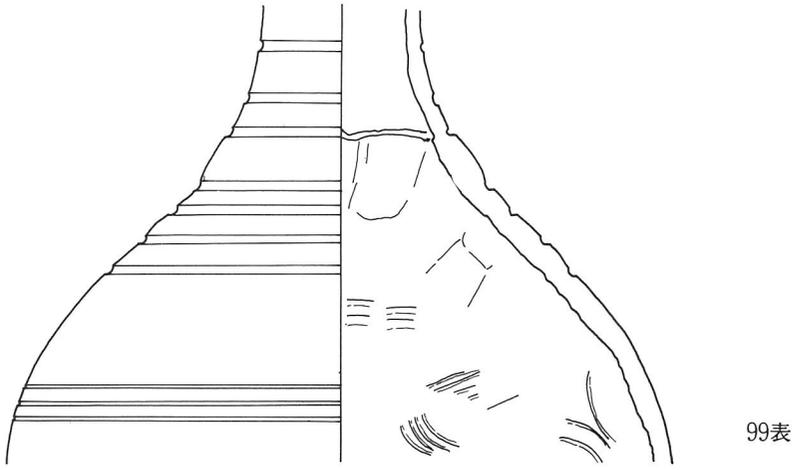
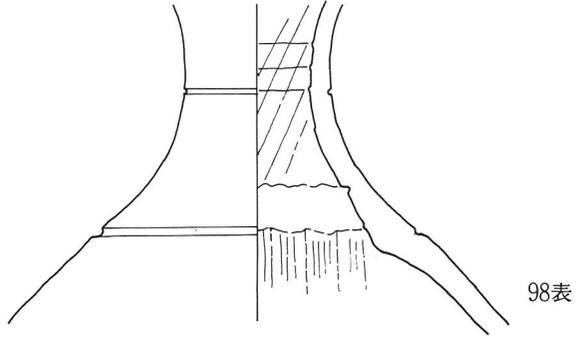


Fig.26 神谷竊跡出土遺物 (徳利・水指)

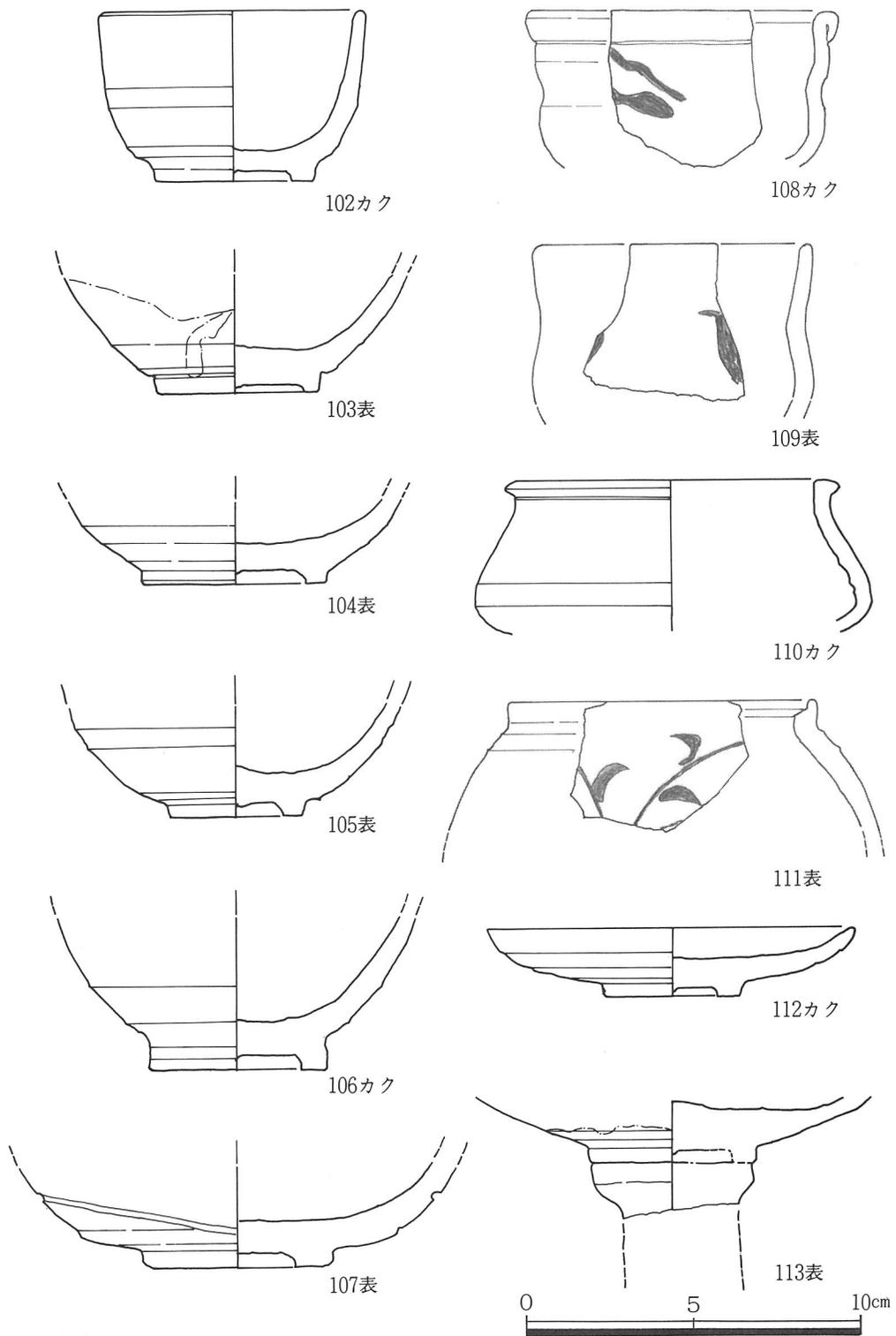


Fig.27 神谷竊跡出土遺物 (碗・皿・壺)

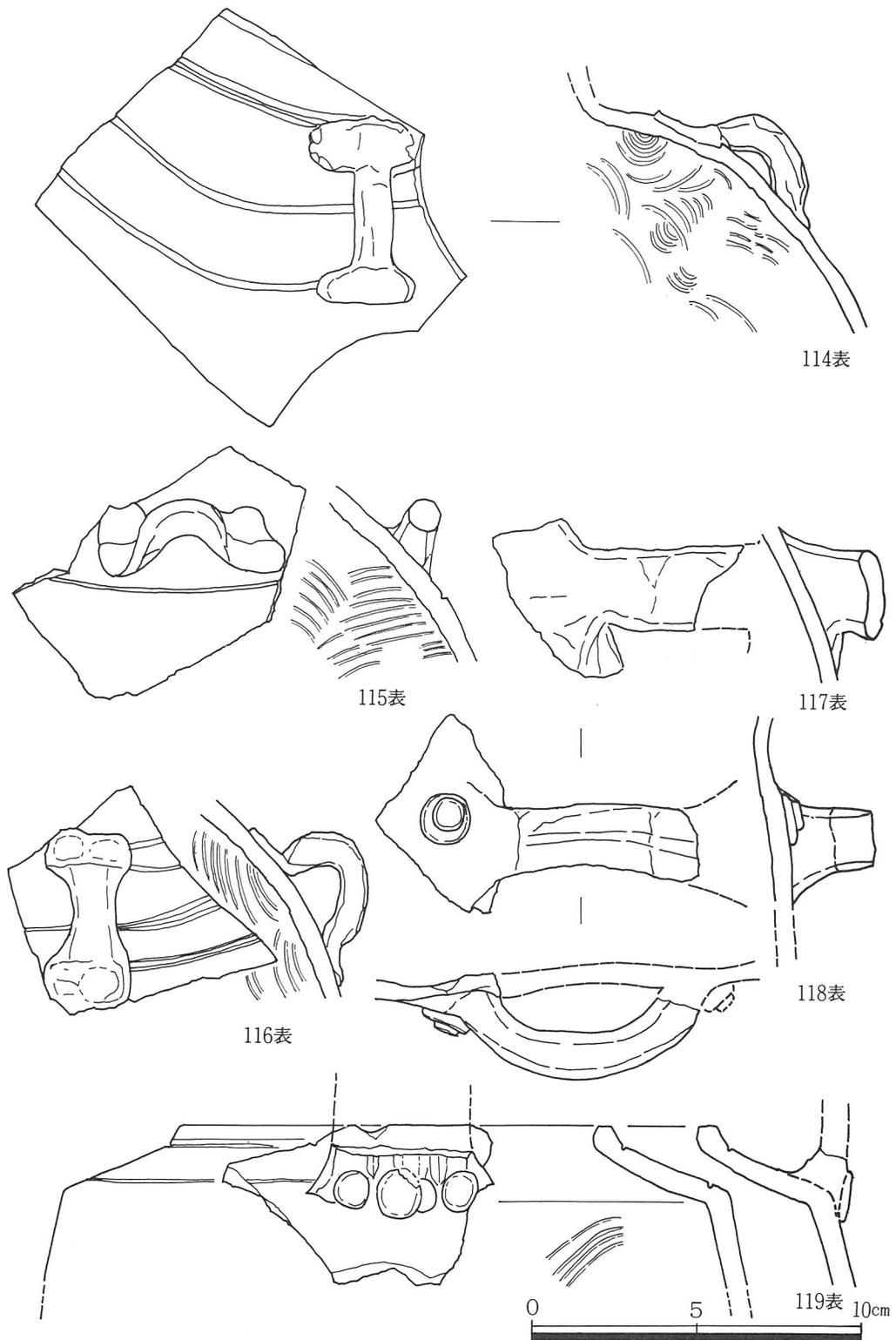


Fig.28 神谷窯跡出土遺物 (把手・耳)

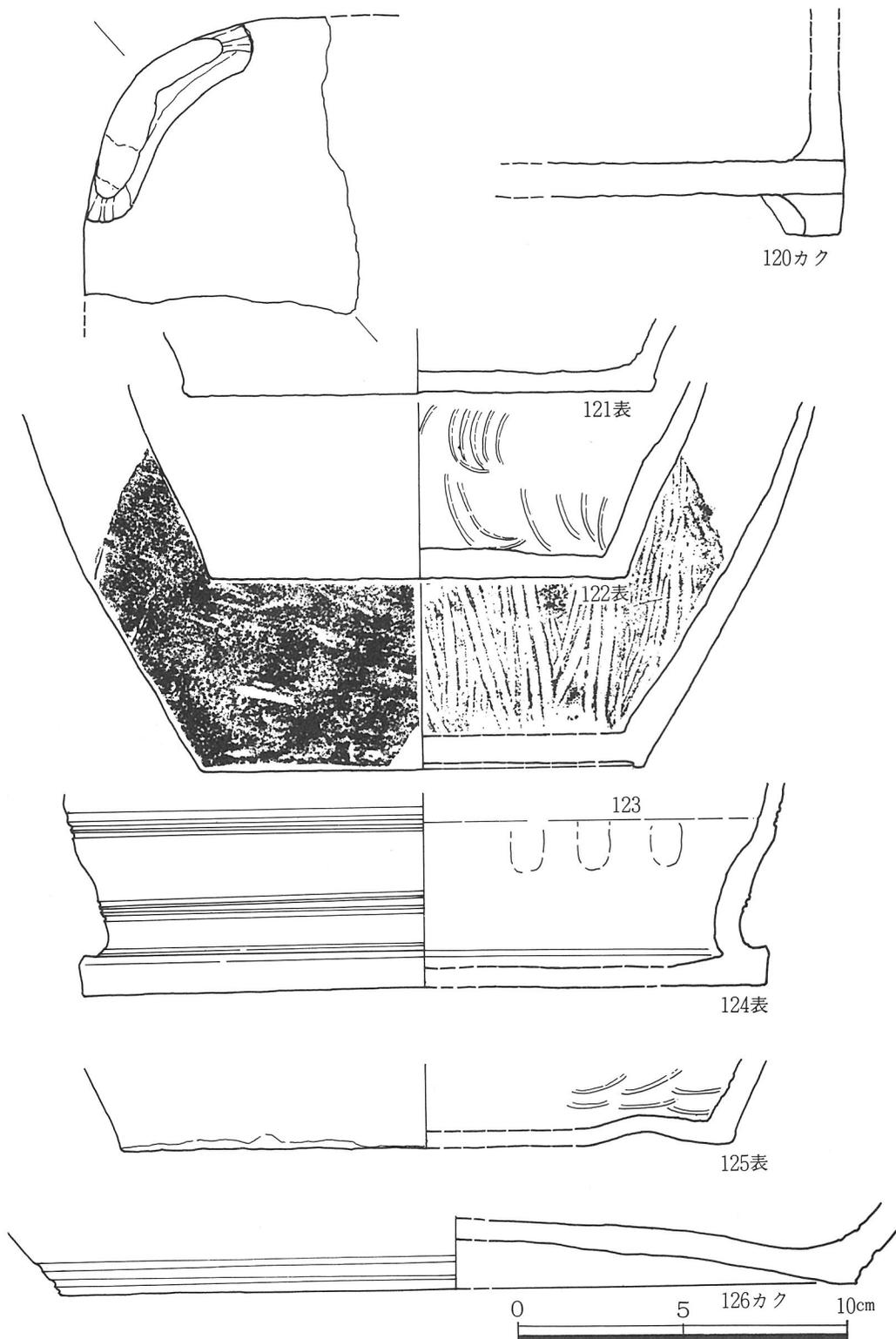


Fig.29 神谷窯跡出土遺物（底部）

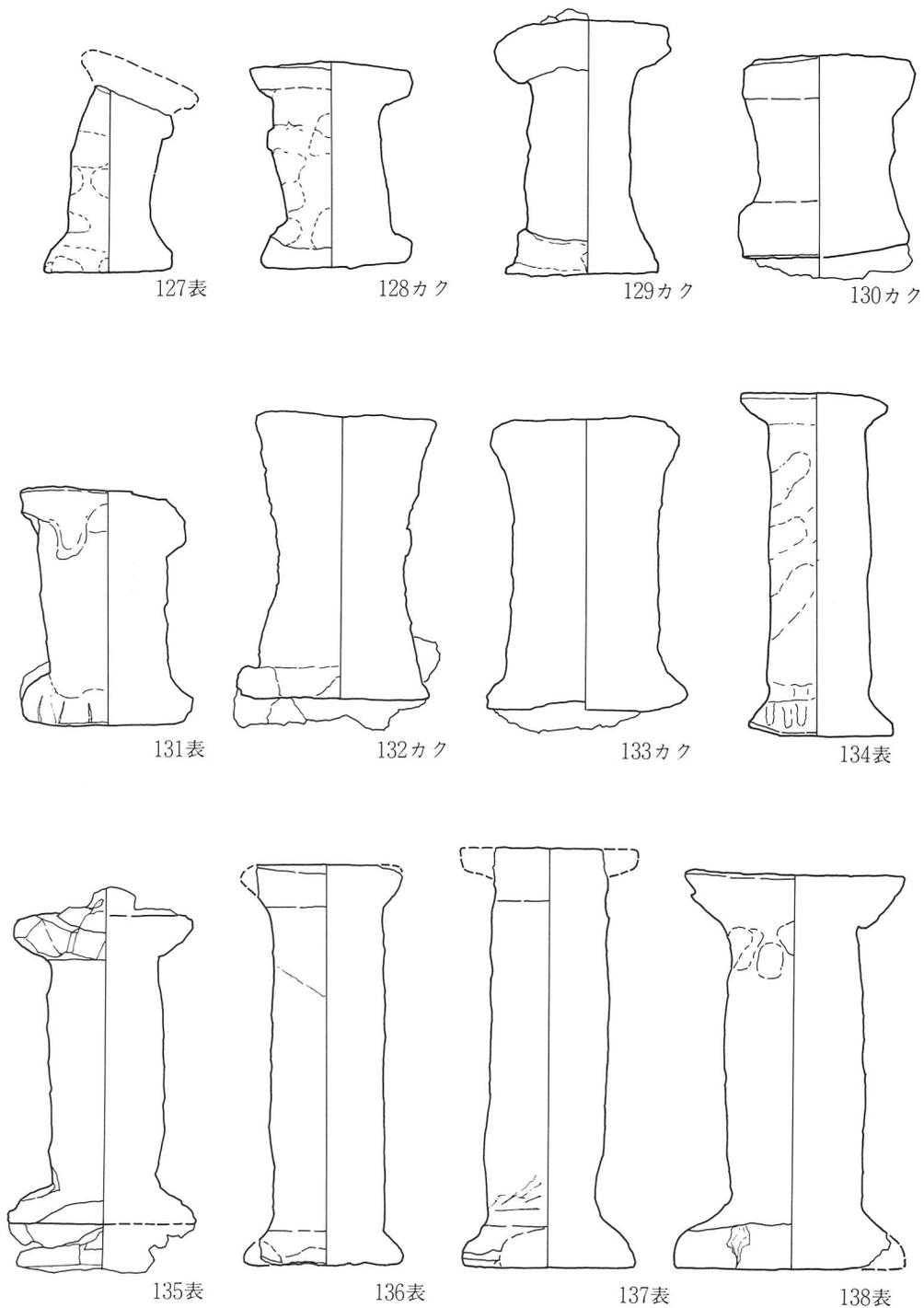


Fig.30 神谷窯跡出土遺物（窯道具）



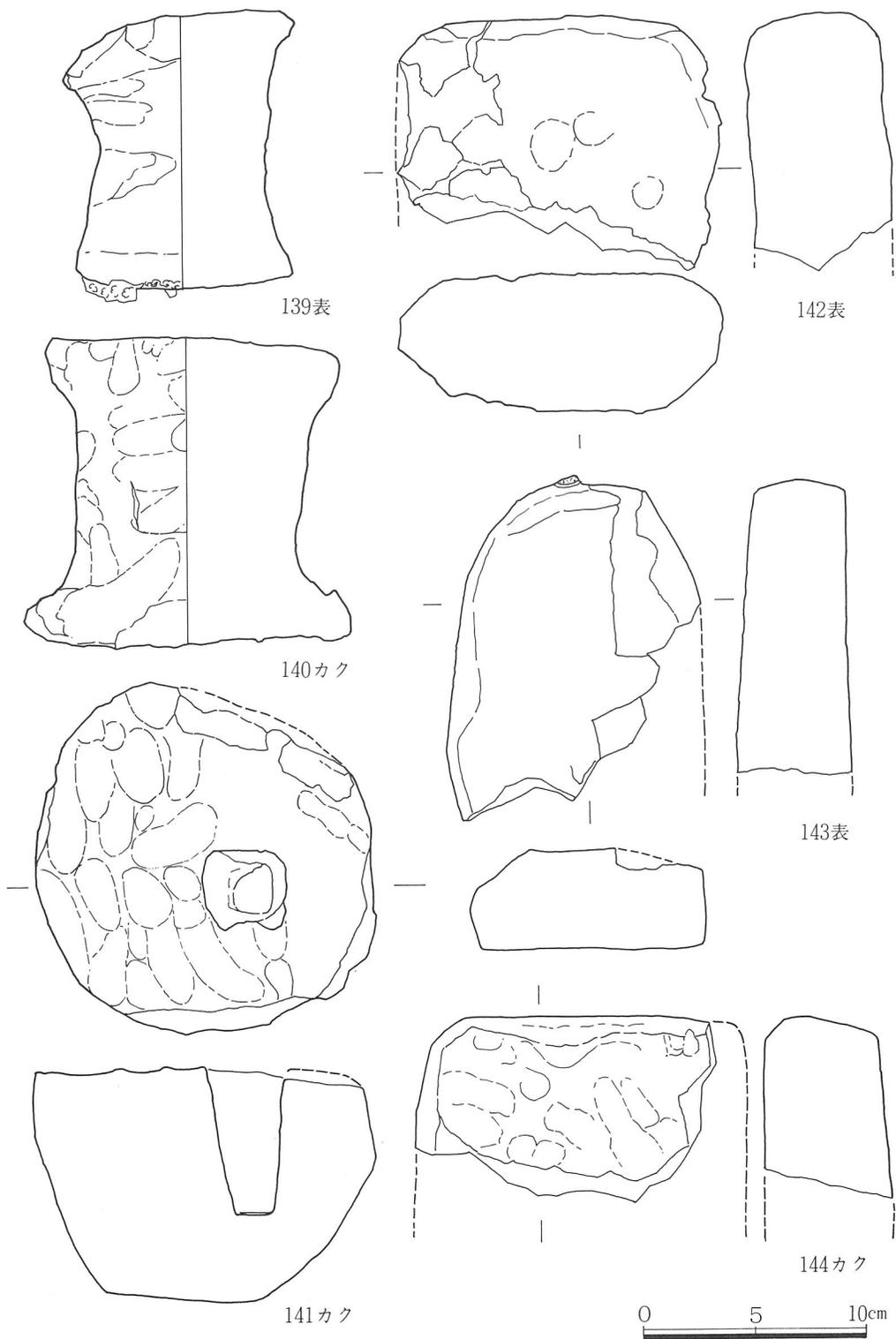


Fig.31 神谷窯跡出土遺物（窯道具）

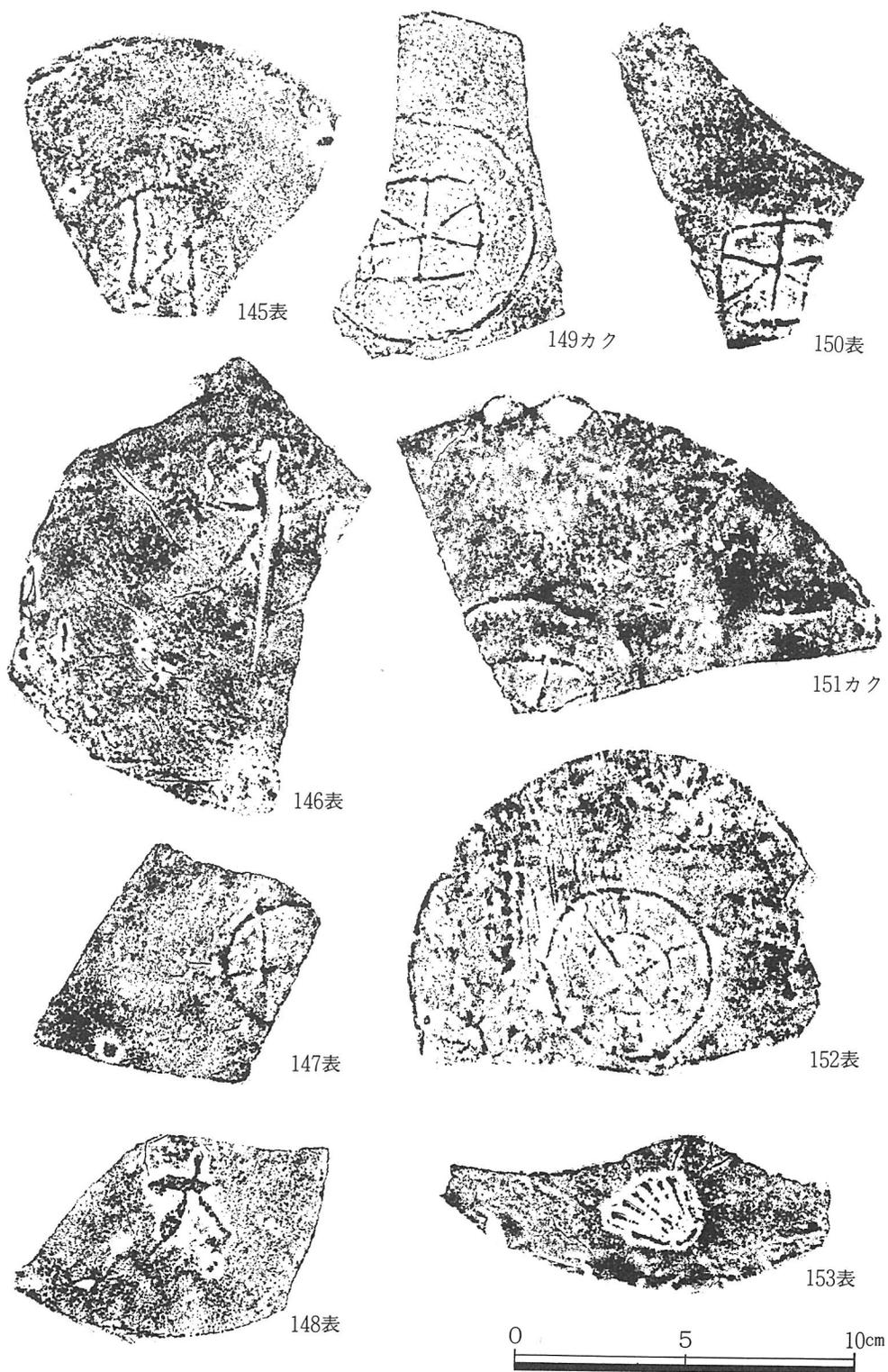


Fig.32 神谷窯跡出土遺物（甕底部拓影）

145は、Fig.29-121の底部・151は、Fig.29-126の底部・152は、Fig.29-122の底部
 153は、Fig.29-125の底部

V. おわりに

これまで、調査の概要を述べてきたが膨大な出土品の整理や遺構の分析はその途上であり、本書で記述した内容等は現時点で理解できた点であり、将来の本報告時点では修正すべきこともありえる。本書の内容が不十分で神谷窯跡の内容を十分に語っていないが、これまで著名でありながら、不明な点が多くあった当窯跡に関する貴重な資料を得ることが出来たのは、最も大きな成果であると考えている。

1) 出土遺物について

出土した遺物には、絵唐津の皿類と甕を中心に、播鉢・片口・壺・徳利・水指・碗・窯道具などがある。焼造品の主体となるのは、甕類Fig19・20や鉄絵を描いた大・中・小の皿類Fig8~18である。

絵唐津の皿類では小皿が特に多くそれには草花の類を描いたものが最も多い。それには^{註1}縁付形と称される胴部がくの字形に屈曲する皿が最も多く、その中には四方皿や^{註2}波縁形(輪花皿)と称されるものが多く認められた。中皿は小皿と同量法の底部をもつものが多く口縁部径のみ小皿に比較して大きい一群であるが、その形態は小皿と同様である。小・中皿には2~3枚重ね積みして焼成したものがあり、^{註3}胎土目痕を持つものが多い。大皿には、松文や海老・千鳥や青海波文を豪放に描いたものが多くありFig8~13それには重ね積みを行う際に小割石(当地の基盤を造っている第三紀層の砂岩を小さく割ったもの)を使用した例がある。Fig10-10

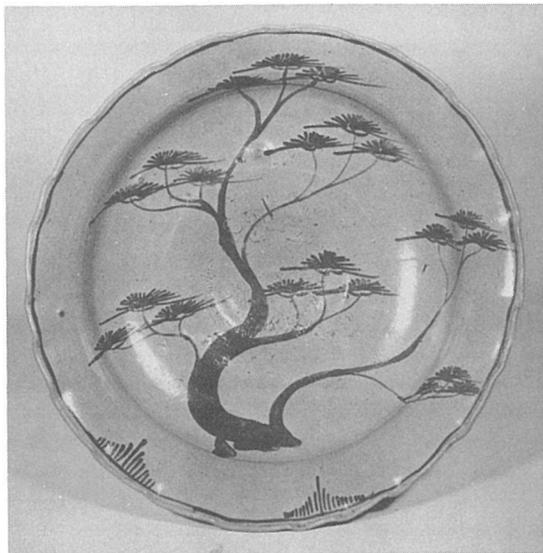


Fig 33 梅沢記念館所蔵・国重要文化財
「松文輪花皿」世界陶磁全集7より転載

皿には、溝縁皿や砂目積跡をもつ例はなくほとんど胎土目積により焼成されたものである。最も多く出土している胴部が屈曲した形態の皿(^{註4}縁付皿)とよく類似した資料には、堺環濠都市SKT19から天正13年(1585)銘木簡と共伴出土している資料や、島根の富田川川床遺跡出土資料中にある。^{註5}

甕は最も多量に出土しており、口縁部径により大・中・小に区分できるが、大径のものでも口径40cmであり、武雄市の多々良窯跡や市内松浦町のカメ山窯跡^{註7}で出土するような大型のもの(口径50cm以上、器高1m内外)は出土していない。口縁部の造りはFig19・20のように口縁部外面に凹線による突帯を2~3条廻らしたものが主であり、この様な口縁部の造りに良く似た資料

が備前焼出土資料^{註8}の中に散見できる。甕の胴部は、ほとんど輪積みによる叩き造りで、内面に青海波状の叩き跡があり、底部には陽印や貝目痕 Fig32-153 や靱殻痕をもつものがある。

播鉢には定形化した形態のものはないが、出土資料のひとつには Fig22-73・76 のように口縁部外面に幅広の凹線を廻らした一群があり、これらは備前焼の播鉢^{註9}の口縁部形態によく類似している。

2) 窯跡について

神谷窯跡は、丘陵の主軸に直交する状況で南西から北東に向かって築かれており、その傾斜角度は17~20°である。今回の調査で6室分、水平距離で10.9mを検出した。旧地形等から考慮すれば10室程度の窯跡であったと推測される。

窯室の平面プランは正方形からやや主軸方向に沿った長方形である。砂床面は10~14°の傾斜をもって作られ、火床と砂床とを区分する明瞭な段差や構造物はなく（本来は断面半月状の火床境的なものは存在したのであろう）、この窯の構造的特徴になっている。火床は各室面積の4分の1前後を占有していたと推定され、有効な焼成室（砂床）の面積は3.5~4.13㎡の範囲に含まれている。各窯室は削平され、窯室外と砂床面の最も低い範囲との差は明確にし難いが、唯一残っているF室の西壁では、壁体外との高低差が40cmほどあり、この窯の砂床面が窯体外の地表面より低く作られていることが窺え、この窯が半地下式であった可能性が高く、全体に窯の構造は古い形態^{註10}を示している。

当窯跡は出土した絵唐津皿の資料中に砂目積^{註11}の跡をもつものや、溝縁皿^{註12}がないこと、窯室の構造や立地から天正年間~慶長年間にかけて操業していたと考えられ、主に皿や甕・播鉢などの日常雑器を焼成し、一部、水指や花入などの茶道具を焼成したと思われ、甕や播鉢の中には備前焼^{註13}の影響をうけたものが含まれている。

註1. 2. 4 水町和三郎氏の分類による。『古唐津』出光美術選書6 平凡社 1973

註3. 11. 12 大橋康二氏によると「…重ね積みをする場合、製品同士が熔着しないよう間に製品の胎土と同じ粘土を団子状に丸めたもの…」であり、慶長年間（1596~1614）頃に砂目積に移行するという。「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館 1984

註5. 『堺市文化財調査報告第20集』 堺市教育委員会 1984

註6. 『富田川』 島根県教育委員会 1984

註7. 『古窯跡分布調査報告書』 伊万里市教育委員会 1984

註8. 9. 「備前・丹波・信楽・伊賀」『世界陶磁全集4』 小学館 1977 P160の備前南大窯跡出土陶片(1)(2)

註10. 秀島貞康氏は、窯室プランには縦長プラン→正方形プラン→横長プランという変化があると考えている。『土師尾野古窯跡群』 諫早市教育委員会 1986

なお、大橋氏も同様の指摘をされている。「肥前古窯の変遷—焼成室規模よりみた—」『九州陶磁文化館研究紀要第1号』 九州陶磁文化館 1986

註13. 桃山時代末期から江戸時代初頭に、市場での備前焼雑器に対する需要の欠を補うために、唐津焼諸窯の中でも備前焼に類似した雑器を焼成したことが考えられる。

参考文献

- 1 『伊万里市史』伊万里市史編纂委員会 1963
- 2 『伊万里市史、続編』伊万里市史編纂委員会 1965
- 3 『大川町誌』大川町誌編纂委員会 1978
- 4 『日本地誌ゼミナールⅧ』大明堂 1975
- 5 『考古学ジャーナルNo.172』中村由克・石井久夫「地質と環境」ニューサイエンス社
1980
- 6 『佐賀県の地名』日本歴史地名大系42 平凡社 1980
- 7 『肥前古窯址めぐり』水町和三郎、田中平安堂 1935
- 8 『肥前陶磁史考』中島浩気 肥前陶磁史考刊行会 1936
- 9 『世界陶磁全集4』河出書房 1956
- 10 『肥前の唐津焼』平凡社 1958
- 11 『唐津』白鳳社 1963
- 12 『陶器講座3』雄山閣 1971
- 13 『古唐津』出光美術館選書7 平凡社 1973
- 14 『肥前陶磁の系譜』名著出版 1974
- 15 『古唐津』佐賀県立博物館 1978
- 16 『日本陶磁全集17 唐津』中央公論社 1980
- 17 『世界陶磁全集7』小学館 1980
- 18 『日本やきもの集成11』平凡社 1980
- 19 『日本の陶磁6 唐津』保育社 1975
- 20 『佐賀県遺跡地図(杵西地区)』佐賀県教育委員会 1981
- 21 『鍋島藩窯跡とその周辺』伊万里市郷土研究会 1975
- 22 佐久間重男教授退休記念『中国史・陶磁史論集』燎原 1983
- 23 『古高取、内ヶ磯窯跡』直方市教育委員会 1982
- 24 『古高取、永満寺宅間窯跡』直方市教育委員会 1983
- 25 『原明古窯跡』西有田町教育委員会 1981
- 26 『葎の本窯跡範囲確認調査報告書』佐世保市教育委員会 1982
- 27 『古窯跡分布調査報告書』伊万里市教育委員会 1984
- 28 『阿房谷下窯跡』伊万里市教育委員会 1985
- 29 『小十窯跡・大良中尾二ツ枝遺跡概報』唐津市教育委員会 1985
- 30 『佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査』有田町教育委員会 1986
- 31 『土師野尾古窯跡群』諫早市教育委員会 1985
- 32 『日本のやきもの 唐津』淡交社 1986
- 33 『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館 1984

PLATES



- 1 神谷窯跡遠景（南西から）
- 2 神谷窯跡調査前状況（南東から）



- 1 神谷窯跡調査区全景（南西から）
- 2 神谷窯跡調査区全景（北東から）



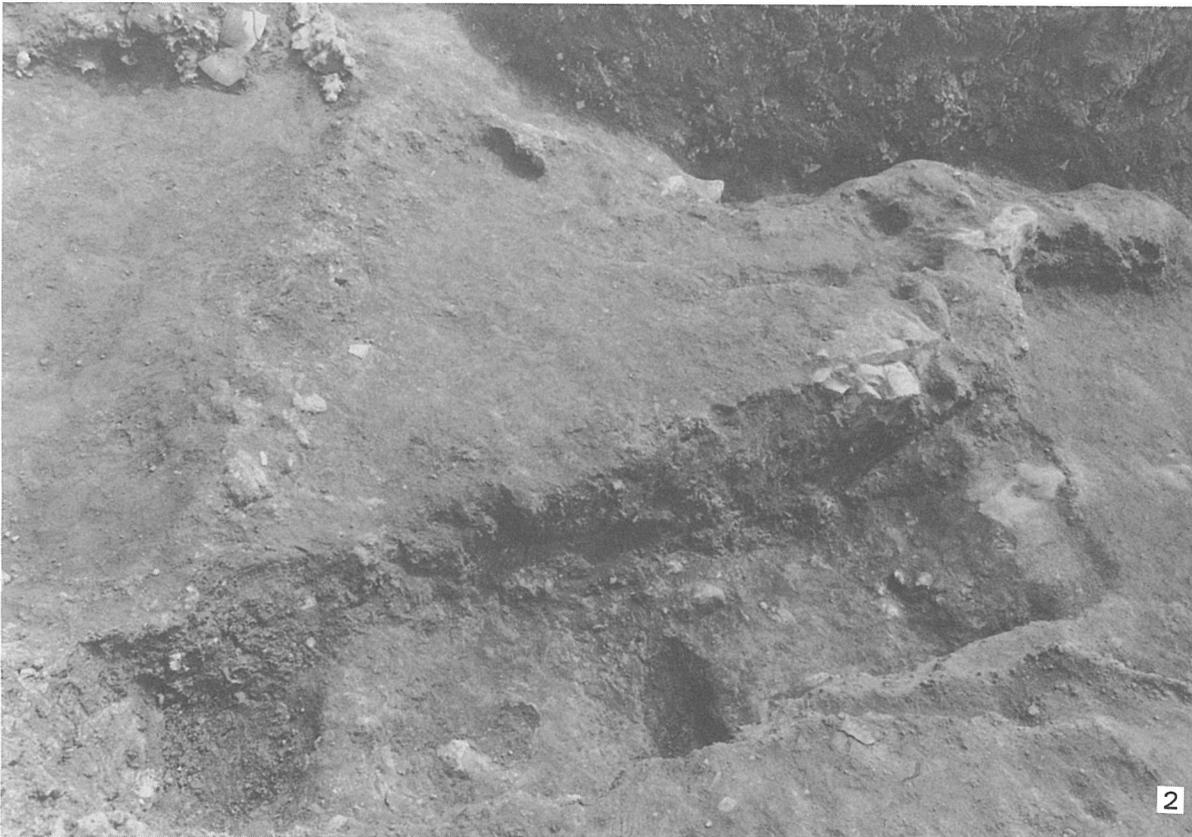
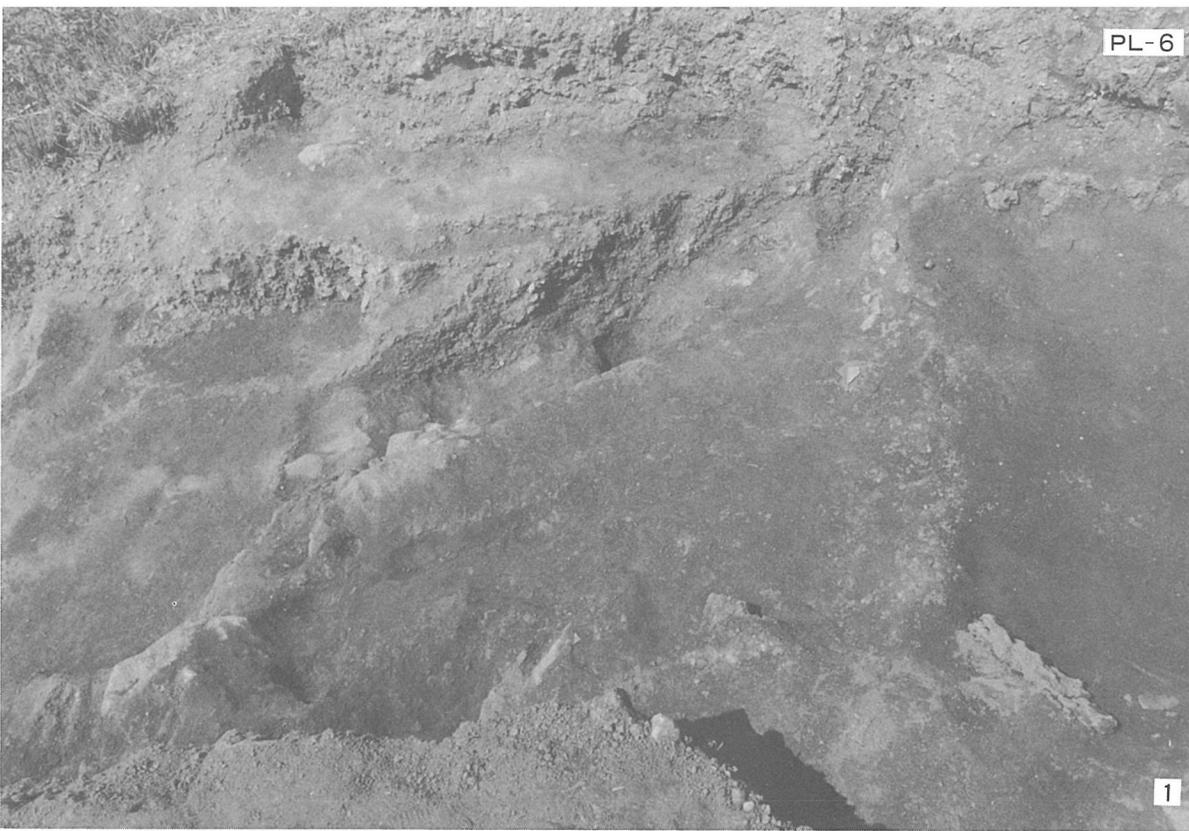
- 1 神谷窯跡E室状況（南東から）
- 2 神谷窯跡F室状況（南東から）



- 1 神谷窯跡F室状況（北西から）
- 2 神谷窯跡F室状況（北東から）

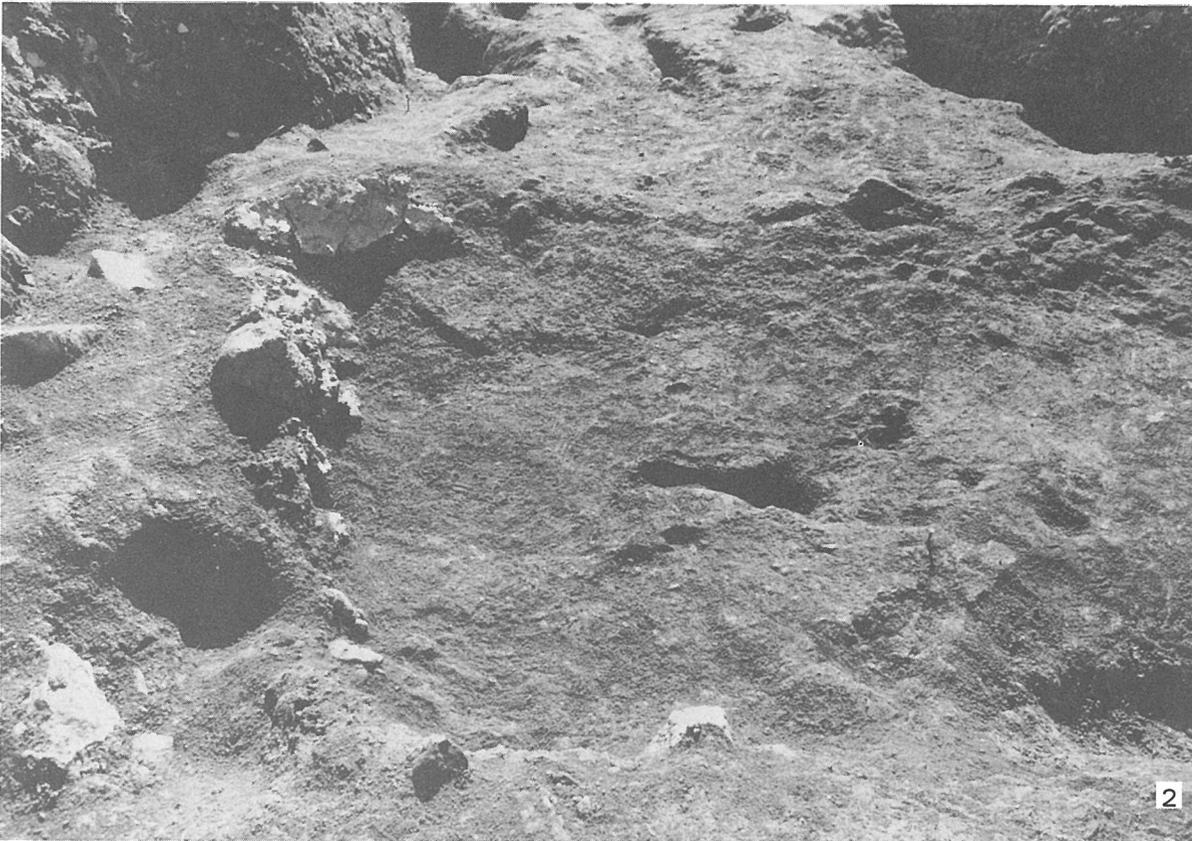
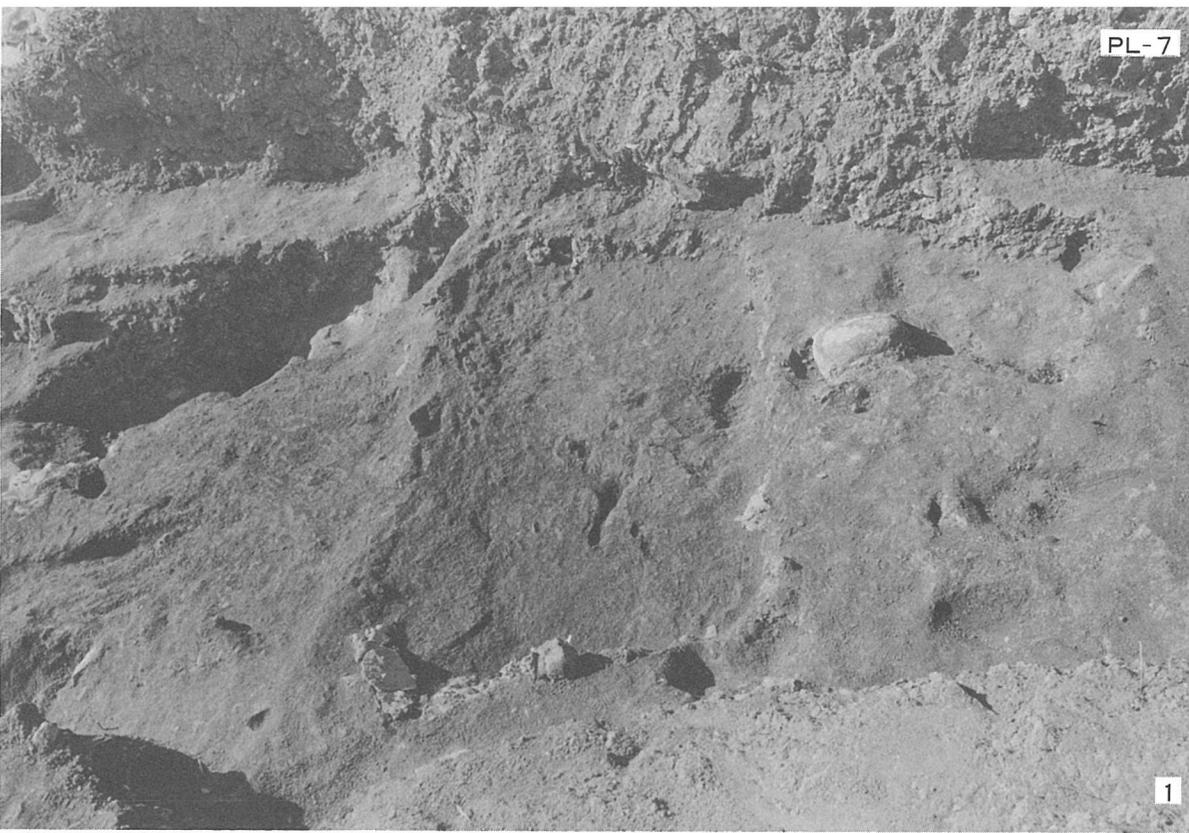


- 1 神谷窯跡F室西窯壁残存状況（南東から）
- 2 神谷窯跡F室奥壁東隅状況（南西から）



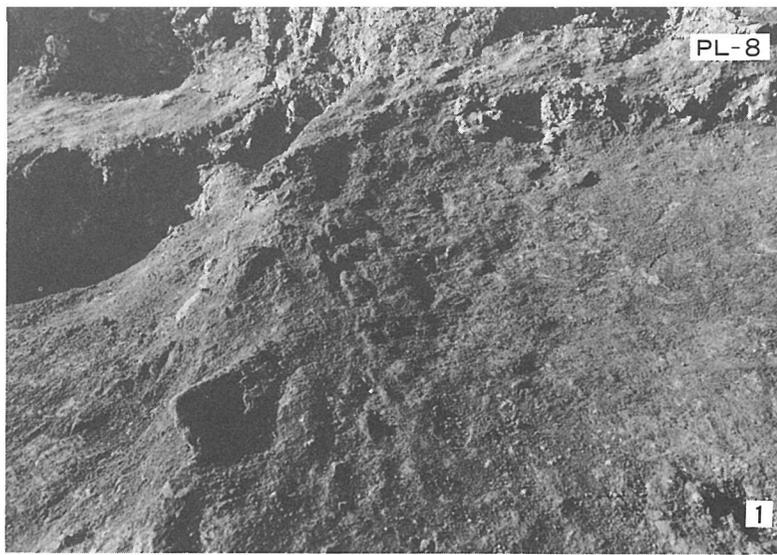
1 神谷窯跡G室状況（南東から）

2 神谷窯跡G室状況（北西から）

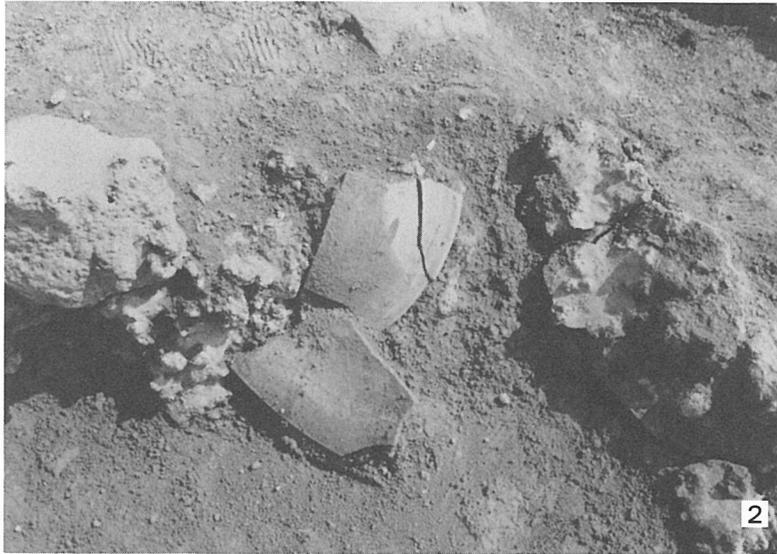


- 1 神谷窯跡H室状況（南東から）
- 2 神谷窯跡H室床面東半部状況（北東から）

- 1 神谷窯跡H室
火床残存状況（南東から）



- 2 神谷窯跡H室
焚き口遺物出土状況
（北西から）



- 3 神谷窯跡H室
東壁残存状況（北西から）



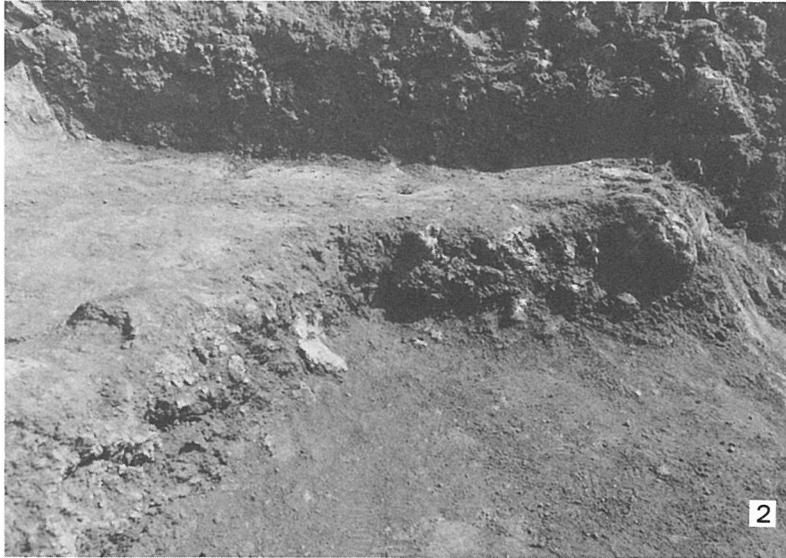


- 1 神谷窯跡I室状況（南東から）
- 2 神谷窯跡I室状況（北西から）

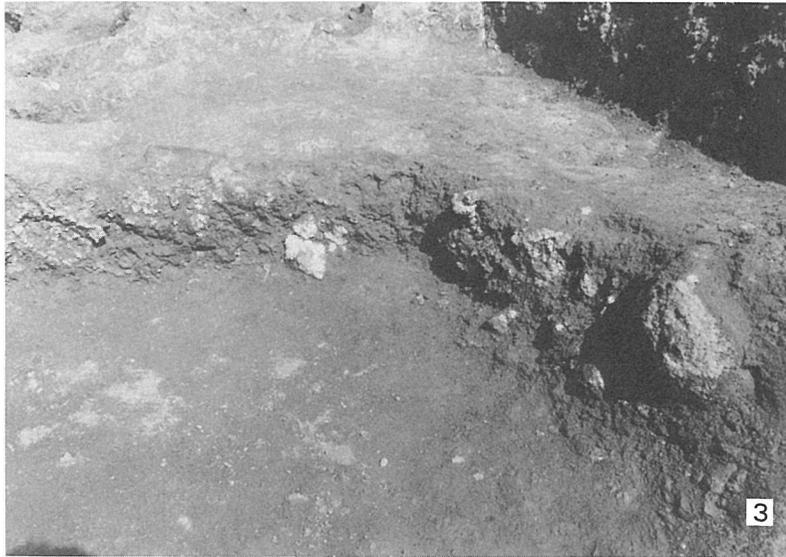
- 1 神谷窯跡I室
奥壁残存状況（南西から）



- 2 神谷窯跡I室
東壁残存状況（北西から）



- 3 神谷窯跡I室
奥陸東隅状況（南西から）





- 1 神谷窯跡J室状況（南東から）
- 2 神谷窯跡J室状況（北西から）

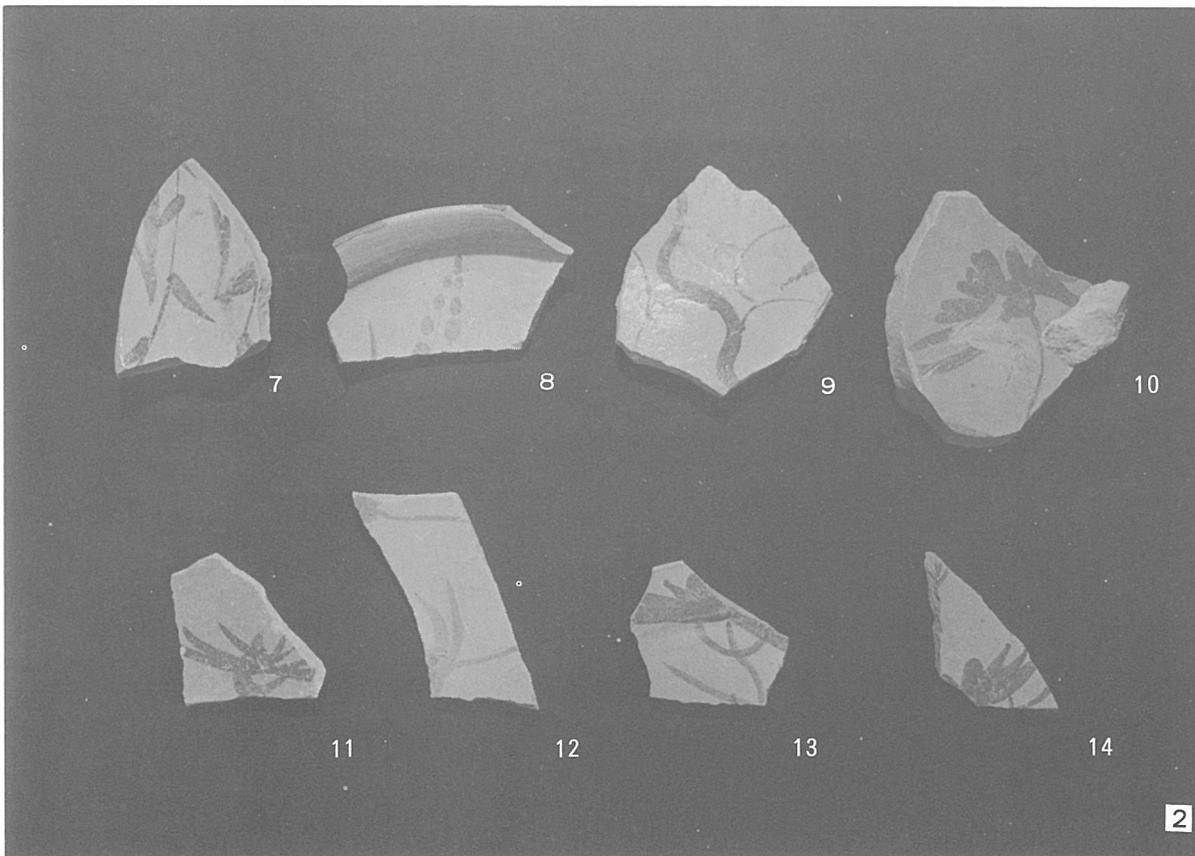
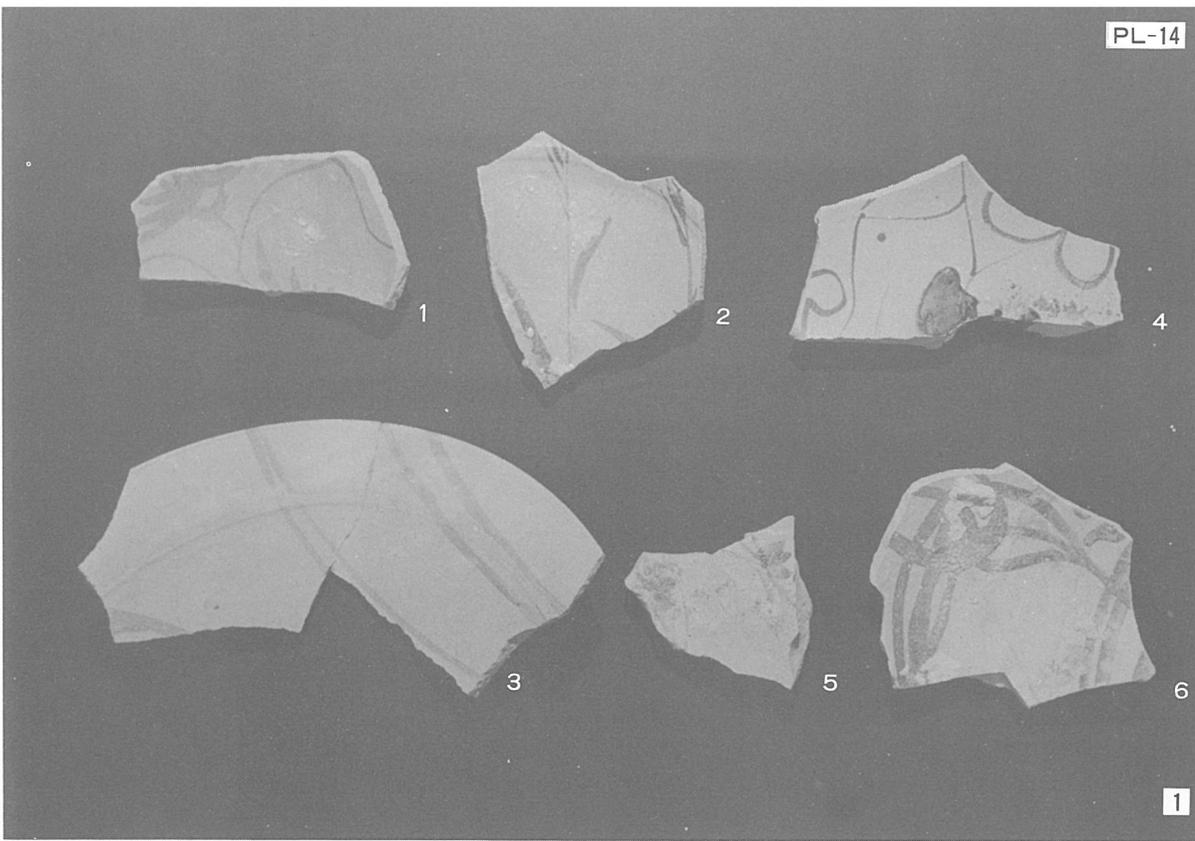


- 1 神谷窯跡F・G・H室状況（南東から）
- 2 神谷窯跡G・H・I・J室状況（南西から）

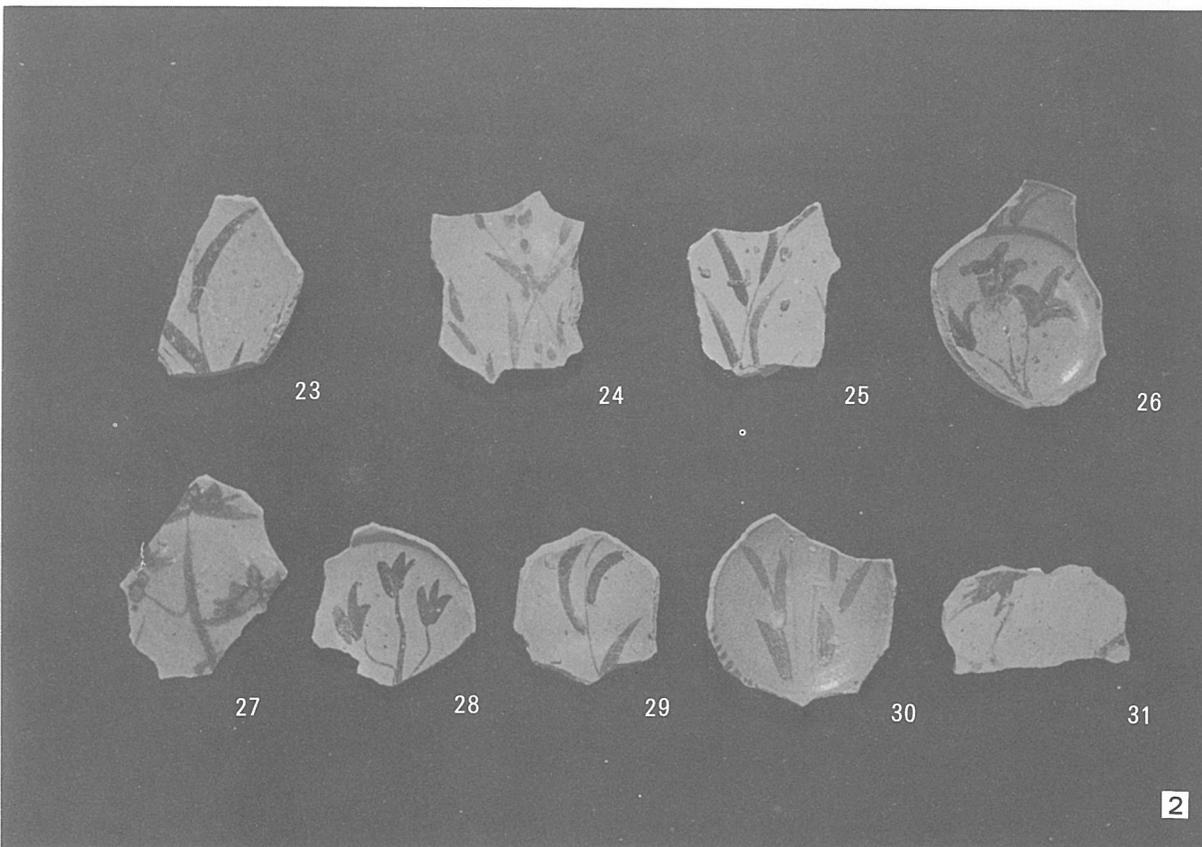
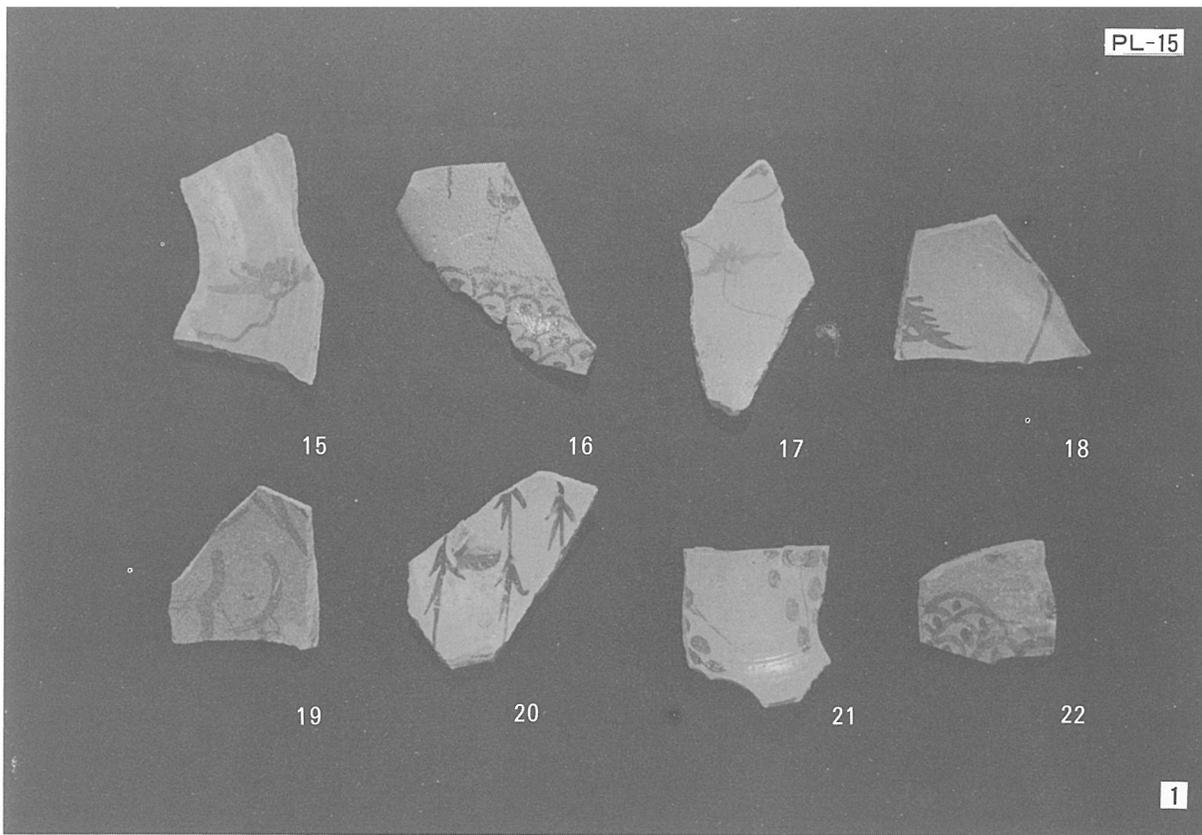


1 神谷窯跡H・I・J室状況（南から）

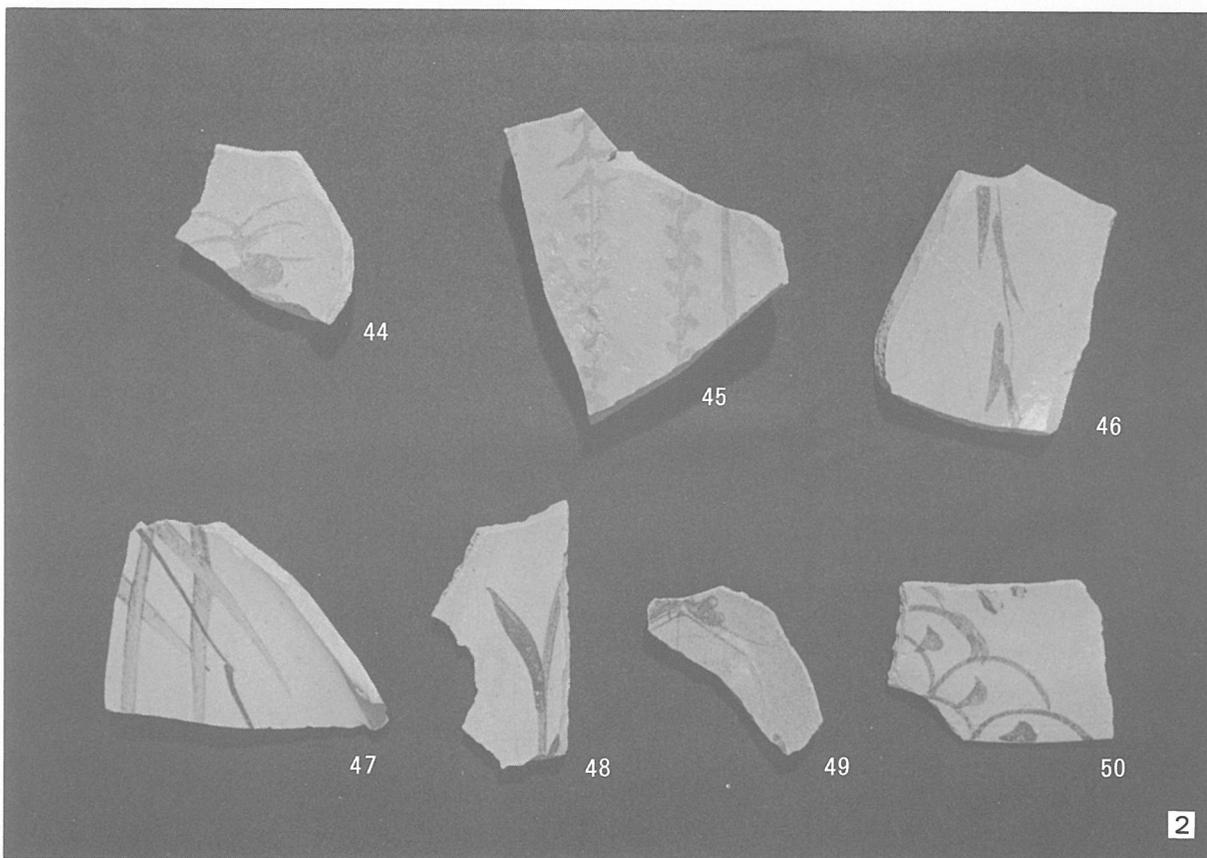
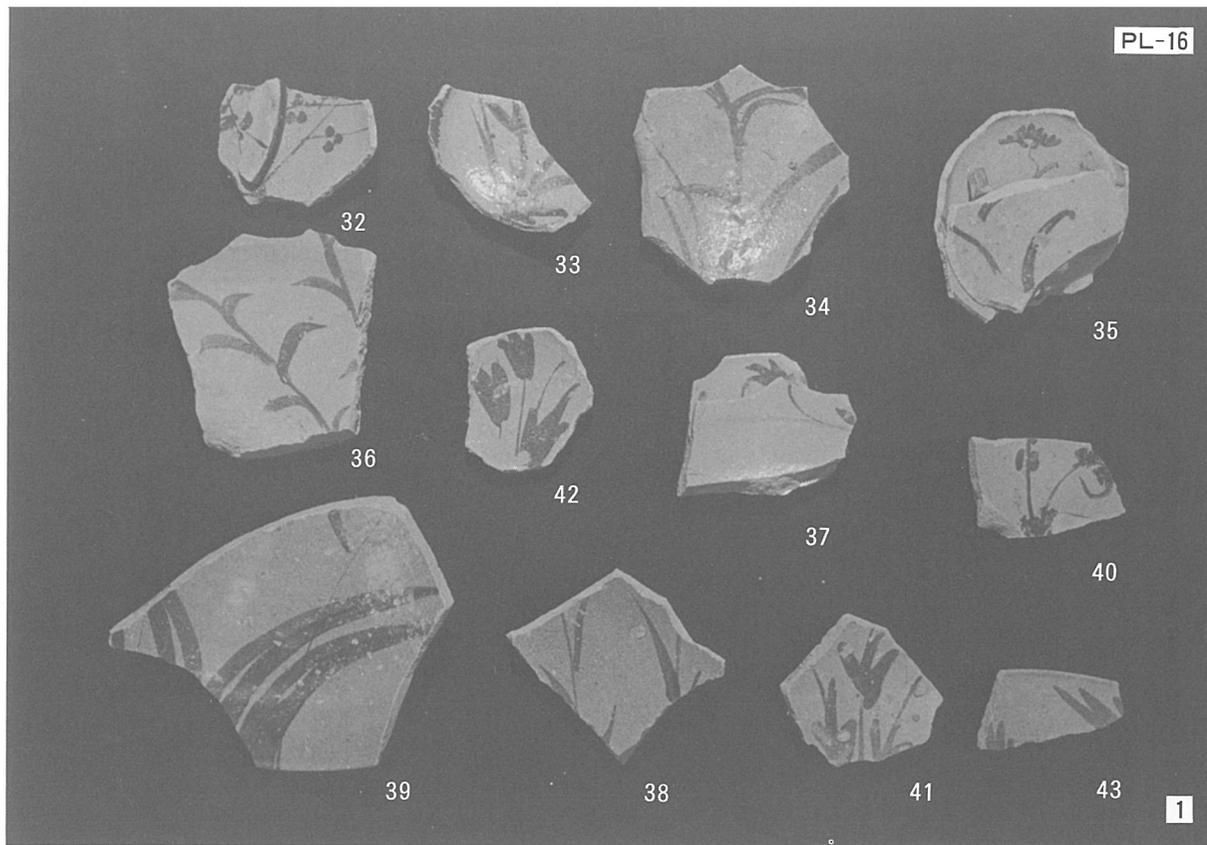
2 神谷窯跡調査風景



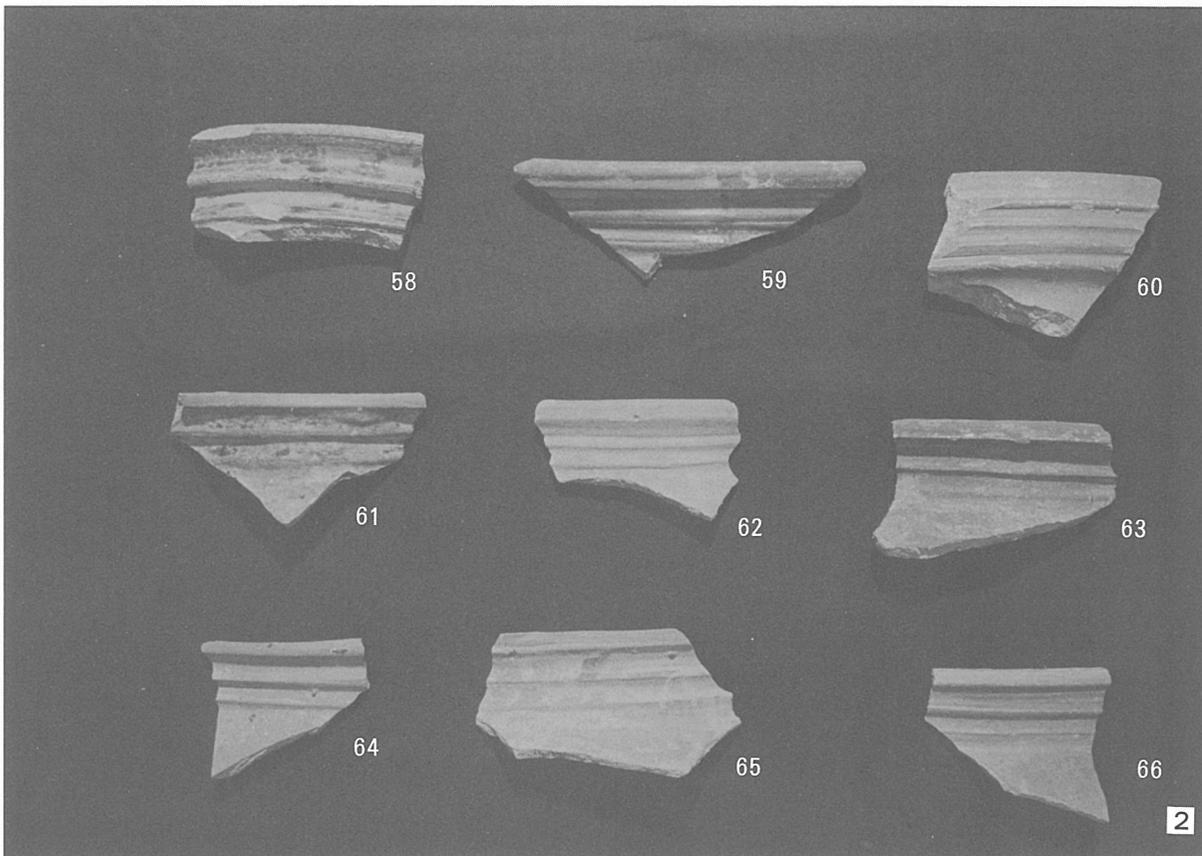
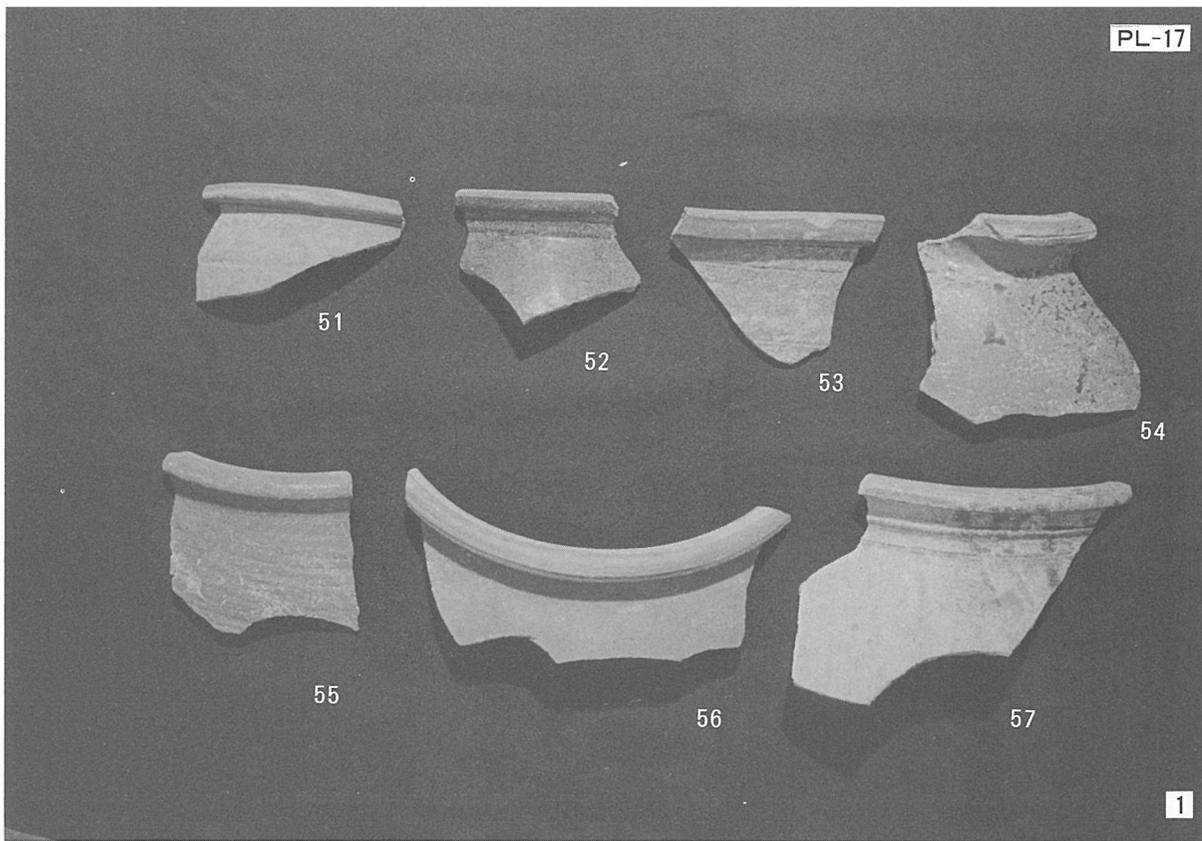
1 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）
 2 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）



- 1 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）
- 2 神谷窯跡出土遺物（鉄絵皿）

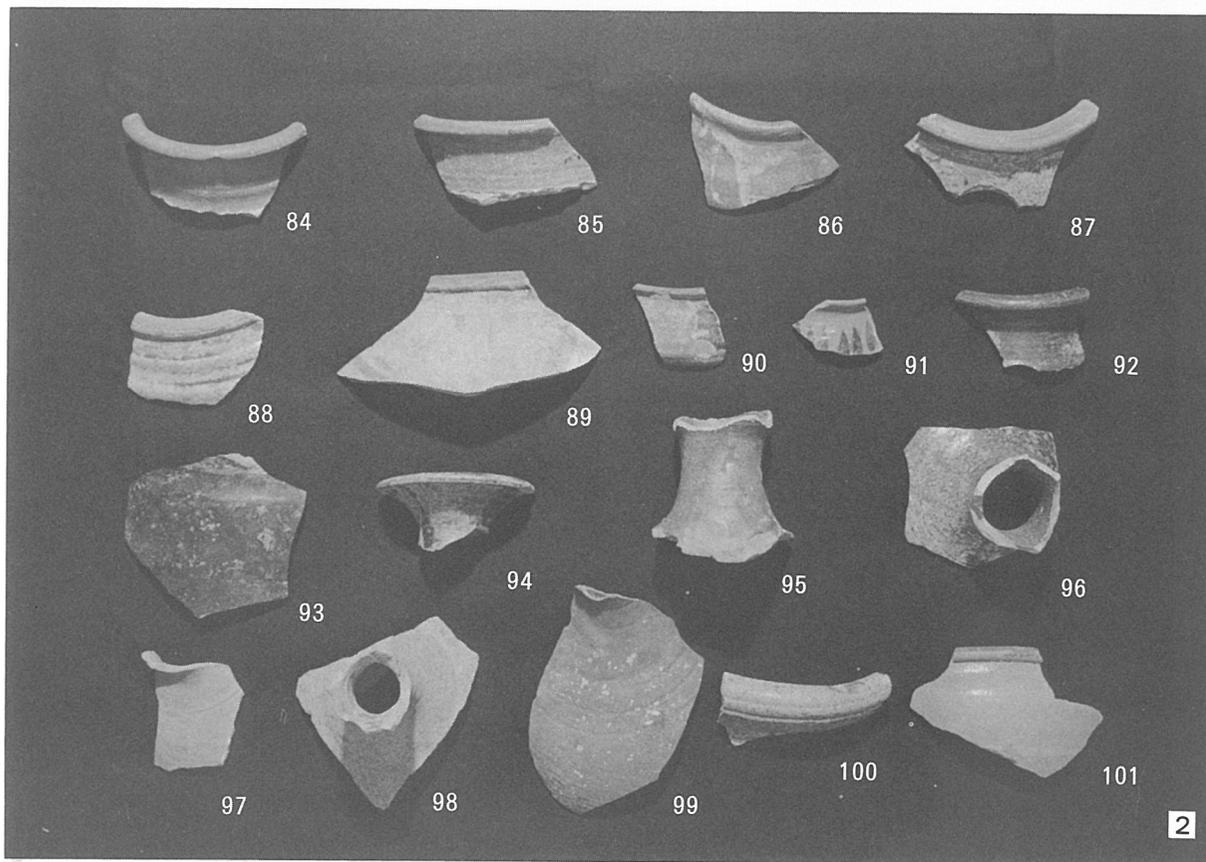
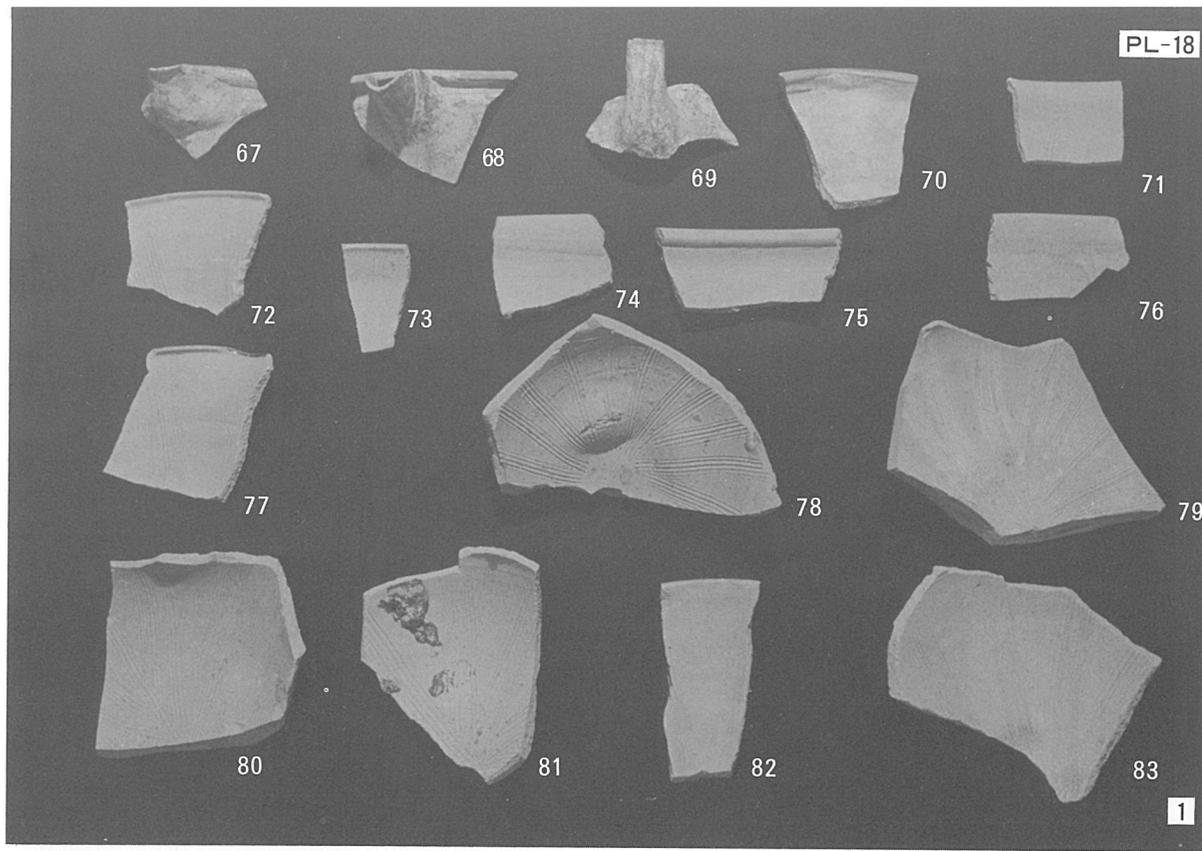


1 神谷窯跡出土遺物 (鉄絵皿)
 2 神谷窯跡出土遺物 (鉄絵皿)



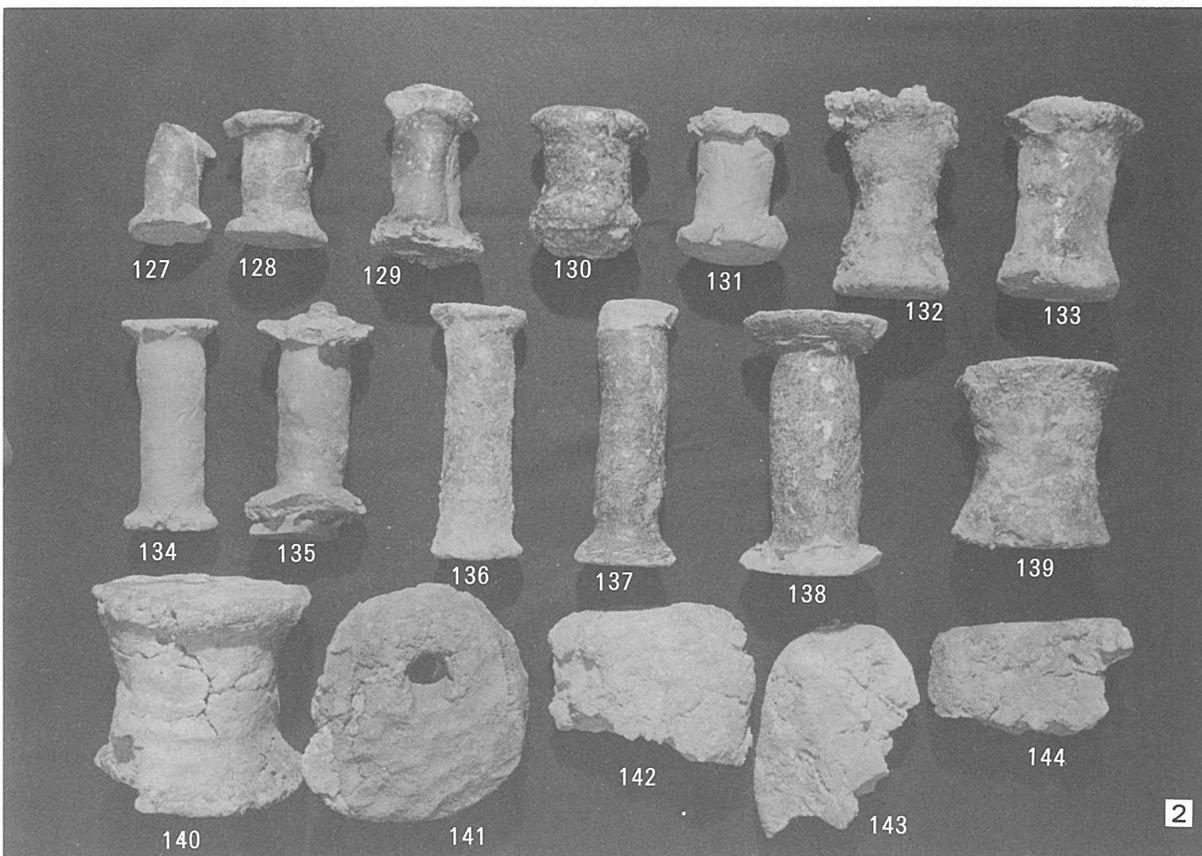
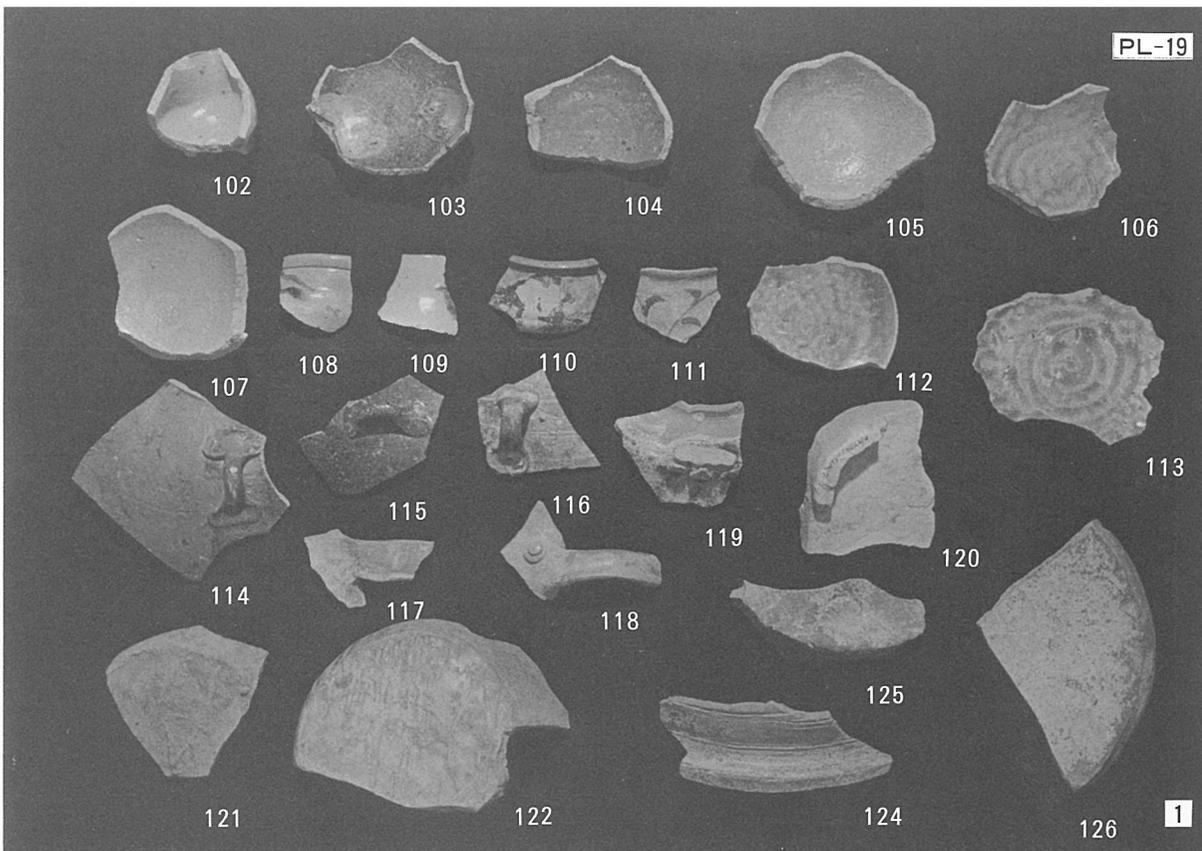
1 神谷窯跡出土遺物（甕）

2 神谷窯跡出土遺物（甕）



1 神谷窯跡出土遺物 (片口、搗鉢)

2 神谷窯跡出土遺物 (壺・德利)



1 神谷窯跡出土遺物 (碗・皿・底部他)
 2 神谷窯跡出土遺物 (窯道具)

伊万里市文化財調査報告書第22集

神谷窯跡

昭和62年3月30日 (No.)

発行 伊万里市教育委員会
〒848 伊万里市立花台1丁目1番1号

印刷 三光印刷株式会社
〒848 伊万里市新天町287-3